金光学園

やつなみ

2019.12

255号

体育会

ほつま祭

部活動紹介

音楽部吹奏楽団

私たち、音楽部吹奏楽団は、大正８年（１９１９年）に創部し、今年100年目の大きな節目を迎える。現在は、中高合わせて、50名程度の部員が在籍している。２０００年代に入ってすぐのように、100名を超える部員数では無いものの、私たちがこれまで大切にしてきた「当たり前のことが、当たり前にできる人になろう」「人の役に立てる人になろう」と言う合言葉を活動の柱に、夏の吹奏楽コンクールには、47年間出場せず、地域でのボランティア訪問演奏や、活動の中心である自主公演「定期演奏会」と、年間30回程度の演奏会を校内外で行っている。

近年の大きな行事としては、２０１７年のアメリカ訪問演奏、２０１８年の全国高等学校総合文化祭への参加が挙げられるが、何といっても、今年度末の「100周年記念演奏会」そして来年度４月に開催の「第48回定期演奏会」であろう。

現在の部員にとっても「自分たちは、100周年の時の部員」という大きな思い出になるのはもちろんだが、この会を開催するにあたり、沢山のＯＢ、ＯＧが協力してくれているというのは周知のことである。この機会に、現役部員と卒業生が様々な事業を通して交流を図り、自分たちの活動を応援してくれている人が沢山いることを再認識し、これからの活動につなげていってほしい。

【創部100年記念演奏会】
２０２０年３月29日（日）　倉敷市芸文館
【第48回定期演奏会】
２０２０年４月29日（水）　福山芸術文化ホールリーデンローズ

サッカー部

金光学園サッカー部は、現在、中学生16名、高校生16名で活動している。サッカーや野球などのメジャースポーツは、小学校から経験を積んでいる者が多いのが一般的だが、金光学園サッカー部の場合、中学からサッカーを始めるという者は少なくない。近年では、高校で初めてサッカー部に所属するという者も増え、現在の高校サッカー部は、部員の半数ほどが初心者という中で、日々和気あいあいと汗を流している。顧問が付きっ切りで練習ができないときは、選手たちで考え練習を行うということもしばしばある。自分たちで考え、教え合い、衝突したり理解しあったりする中で、サッカーへの理解が深まり、コミュニケーション能力が向上し、更に友情を育むこともできる。目標は、中高ともに県大会出場。中高６年間を同じ仲間と闘えることが金光学園サッカー部の一番の魅力。サッカーの技術だけでなく、生涯の友人関係も築いて欲しいと願っている。

出会いに感謝

亀山　妙子

「平成」から「令和」へと元号が移り変わり、金光学園においても創立125年という記念すべき年を迎えた本年も、「ほつま祭」が盛大に開催されました。私達保護者も、生徒達の熱気に負けないくらいの愛情で、学園のため、そして大切な子供達のために「手作り会」を編成し、友愛セールに出品する金光ベアやミニチュア制服、数々の手作り品の製作に励みました。あまりミシンを使う機会がなかった私ですが、ベアの顔や手のパーツを縫いあげ、出来上がったベアの愛らしい表情を見たときの喜びはひとしおでした。今年はミニサイズの金光ベアキーホルダーにも挑戦し、皆様に喜んで頂くことが出来ました。また、昨年よりはじめた多肉植物の寄せ植えも、もともと土いじりが好きな私は、楽しみながら育てることが出来、わが家の子宝草も皆様にお届けすることが出来ました。今年もたくさんの手作り品をお買い求め頂きありがとうございました。

手作り会を通して、多くのお母様方との出会いがあり、共に過ごし、一人では出来ないことも、皆様のご意見やご協力のおかげで、素敵な作品が沢山出来ました。皆様の優しさや思いやりに感謝の気持ちでいっぱいです。

校長先生をはじめ諸先生方には、いつも支えて頂きお礼申し上げます。役員としての活動はあと僅かとなりましたが、これからも、皆様の温かいご協力のもと活動してまいります。私の人生において、多くの保護者の方々と出会い、共に過ごした時間は宝物となりました。出会ったすべての皆様に……ありがとうございます。

（金光学園やつなみ保護者会副会長）

目　次

巻頭言……1
金光学園創立125年記念式……2
道(25)……10
メタセコイヤ……12
活躍おめでとう……14
活躍する卒業生　河田　晟生……20
やつなみ保護者会のページ……22
友愛セールご協力の御礼……24
やつなみ保護者会総会記念講演……25
グローバル研修……28
体育会……41
ほつま祭……46
高２修学旅行……50
生徒入賞作品……62
生徒会活動……68
会報……76
学園だより……78
教室の窓から・編集後記……82

金光学園創立125年記念式

金光学園創立125年記念式が、11月14日、厳かに挙行された。晴天の下、朝8時15分、校長と生徒代表（高3眞田憲尚君、中3山田紋歌さん）が本部広前に参拝し、教主金光様にお礼のお届けをした。8時30分、全校生徒、教職員揃って本部会堂前より参拝し、その後、教団墓地と初代校長の頌徳碑を巡拝して帰校した。

ほつま体育館に、37名のご来賓をお迎えし、金光学園中学・高等学校の生徒1029名、教職員が一堂に会し、10時に音楽部吹奏楽団と音楽部コーラスによる「神人の栄光」の演奏で祭事が始まった。まず、感謝祭・慰霊祭が行われ、学校法人金光学園理事長和泉先生の祭詞に始まり、新霊人ご遺族代表及び各代表より玉串が奉奠された。

式典では、国歌斉唱の後、25年勤続の宰相夕佳教諭が表彰を受けた。続いて校長式辞、金光教教務総長祝辞、生徒代表の所願表明の後、金光学園歌斉唱で式典は締めくくられた。

休憩の後、11時40分から桑田茂氏（RSK山陽放送株式会社　代表取締役社長）より記念講演をいただいた。演題は「チャレンジ！　NEW RSK　～地方放送局にできること～」。

地方放送局ならではの番組制作、ご自身で行った取材、プロゴルファー渋野日向子さんについてなどを後輩達にユーモアを交えて語られた。その後、13時30分にほつま体育館で全教職員の記念写真を撮影した。

式辞

校長　金光　道晴

暦の上では既に立冬を迎え、一週間が過ぎました。10月には30度を超える日もありましたが、11月も半ばとなり、朝夕は冷たさも感じるようになり、今日も午後からは寒くなり明朝は大変冷え込むと伝えられています。

令和元年という新しい時代の初めの晩秋の今日のよき日に、金光学園創立125年の記念式典を、このように麗しく盛大に挙行させていただきますことは、誠に有り難く喜ばしいことであります。本日は、講演をいただく桑田茂山陽放送社長様をはじめ、ご来賓の皆様には公私ともご多用の中、ご臨席を賜り誠にありがとうございます。また、この5年間にお亡くなりになられました学園の卒業生や元教職員のご遺族の皆様方には、先程仕えられました感謝祭・慰霊祭にご参拝いただき、引き続き記念式典にもご臨席賜り、誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。

今朝ほどは、創立記念式に先立ち、生徒・教職員全員そろって金光教本部広前に御礼の参拝をさせていただき、高3の眞田憲尚君と中3の山田紋歌さんが代表して、ここまでの御礼とこれからのお願のお届をし、さらに木綿崎山の教団墓地や、初代校長佐藤範雄先生の頌徳碑を巡拝して、先ほど帰校してこの式典に臨ませていただいております。

さて、私はこの創立記念式では、毎年学園の様々な歴史や素晴らしい卒業生の方々を取り上げてお話ししておりますが、本日はこの写真の方のお話をさせていただきます。この方は、昭和2年（1927年）、旧制28回の卒業生で、今から29年前に亡くなられた金光教の前教主金光鑑太郎様で、教祖様の曾孫にあたられる方であります。先程皆さんと参拝した教団墓地に祀られている方でもあります。覚えていてくれている人もいるかもしれませんが、昨年の創立記念式では三代金光様といわれるこの方のお父様で、13歳から83歳まで70年間お盆もお正月も、土日も祝祭日もなく毎朝4時前から夕方まで一日の休みもなく、ひたすらお取次ぎという御用に奉仕された金光攝胤様の話をいたしました。

この方はその三代金光様の御長男で四代目として、その後をお受けになり、28年間教主としての御用に当たられた方であります。しかし皆さんにとっては碧水様と言った方がわかりやすいかもしれません。と申しますのも金光学園には碧水庵というお茶室がありますが、実はあの碧水庵は書家でもあり歌人でもあったこ

の四代様の号である碧水という名前がつけられたお茶室なのであります。お国替えされた後、この方のご遺志にそって、ご家族から金光学園教育に役立てて欲しいとのご厚志をいただき、そのご寄付をそっくり使わせていただき、創立百年の記念事業の一つとして竣工したのが茶室「碧水庵」なのであります。

そのようなゆかりのある方でありますが、皆さんの教室に掲げられている合言葉の額の文字も、正門を入った所の合言葉の石碑の文字もこの方の筆によるものであります。さらに、高校棟の西壁面の下の植え込みの石碑にもこの方が詠まれた「自然と共に今日もわがある喜びのあいさつかはす庭の木草と」という歌が刻まれています。さらに、皆さんに中高の入学式の時にお渡しした「にちにちがさら」の日めくりの文字もそうであります。先程書家でもあり歌人でもあられた方と申しましたが、生涯で詠まれた歌は何と4万4千首に及んでおり、そんな多くの歌を詠んだ人は日本中探してもいないのではないでしょうか。

この前教主様、碧水様から金光学園にいただいた21首の短歌があります。それを印刷したものを、毎年、中高の入学式の時にお渡ししていますが、皆さんは覚えているでしょうか。今日は全部を紹介する時間はありませんので、その中で25年前の創立百年の年の記念品に残されている3首、このお歌を紹介したいと思います。

後ろの方の人は良く見えないと思いますが、1つ目は学園では入学式などには必ず保護者の方々に紹介する歌で「ちちははもこどもとともにうまれたり、そだたねばならぬ子もちちははも」という歌ですが、皆さんも聞いたことがあるのではないかと思います。食堂の2階の大ホールには板に彫られたこの歌が壁に掛けられています。この歌は生徒の皆さんにとってというより、お父さんやお母さんにとって大切な親としての心構えや在り方を詠まれたものであります。したがってやつなみ保護者会としてもずっと大切にされてきたお歌であります。

2つ目は「よきことの話題にのぼるききをれば　世に明るさの加わるごとし」という歌であります。私達人間の心というのは、心配したり、つらい思いをしたり、悔しがったり、時には人を恨んだりすることさえあります。そしてついつい暗い悲しい気持ちになってしまいますが、しかしこの歌に詠まれているように、明るく、良い出来事や話題は人の心も明るく、元気にしてくれます。先日のラグビーワールドカップでの日本チームの活躍や、今日この後の講演でお話されるかどうか分かりませんが、RSK山陽放送所属のプロゴルファーの渋野日向子さんの活躍には大変元気をもらいました。教祖様も「おかげは和賀心にあり」と言われていますが、和らぎ喜ぶ心におかげはあり、良きものが生まれてくると教えられています。

3つ目は「ここまでは出来たとよろこぶべきことをこれしか出来ぬといいてなげくか」という歌であります。これも人の心持ちの大切さを詠まれたものであります。私たちは日常生活の中で出来ないことを悲しんだり残念がったりし、出来ていることや出来たことはあたりまえとして受け止めてしまい、そのことに喜びや感謝の気持ちを十分には持てないことがあります。この歌は出来たことの喜びを大切にしたいと詠まれたものであります。皆さんは毎日ぐっすり眠れ、さわやかに目覚める事、美味しく食事がいただける事、元気で勉強や部活動ができ、健康に過ごすことが出来ている事などに感謝する気持ちを持っていますか。案外当たり前の事になってしまってはいませんか。

もしかしたら自分が思うようにいかなかったことを環境や人のせいにして不平や不満を持つことになってしまっていないでしょうか。

今、3つの歌を紹介しましたが、この3首の歌には共通する所があることにお気づきでしょうか。それは3首とも人の心の持ち方の大切さが詠まれたものであるということです。実は金光学園にいただいた21首全ての歌に共通しているものは、人間の心の持ち方の大切さを詠まれたものばかりであるということなのです。4万4千首の歌全てといっても過言ではありません。「お礼や感謝の心」、学園の合言葉にあるように「すべてを大切にする心」など、人間の心の持ち方をどこまでも大切になされ、み教え下さった方であります。大切なのはその心構えや、心持ちなのです。

今日は学園の大先輩でもあり、金光教の前教主様のことやお歌の事をお話しましたが、終わりに、皆さんがここからの学園生活はもとより、これから先もずっとこのお歌に詠まれているような心や、学園の合言葉の精神をどこまでも大切に

していただくことをお願いして式辞といたします。

「人をたいせつに　自分をたいせつに
物をたいせつに」

来賓祝辞

金光教教務総長　西川　良典
（総務部長　三浦　義雄　代読）

本日は、創立125年となる記念式を迎えられましたこと、私を含めご来賓の方々と共に心よりお祝い申し上げます。

本学園の創立を振り返りますと、初代校長の佐藤範雄先生が、金光教の教祖である金光大神様にまみえられたことに始まります。先生は初めて教祖様のもとに参拝された時、「人を助ける身になれよ」とのお言葉を受けられました。以来、そのみ思いを求め、歩みを進められる中で、次第に「人が助かるための学校」「世と人のお役に立つ人材が育つための学校」の必要性を感じられるようになりました。

その願いのままに金光学園は、明治27年に創立され、以来、「心の教育を土台にした人間教育」の精神に基づいて学風を育み、「世と人のお役に立つ」多くの人材を輩出してこられました。本日ここに、創立125年の記念式を迎えられましたことは、私どもにとりましても、まことに感慨深いことでございます。

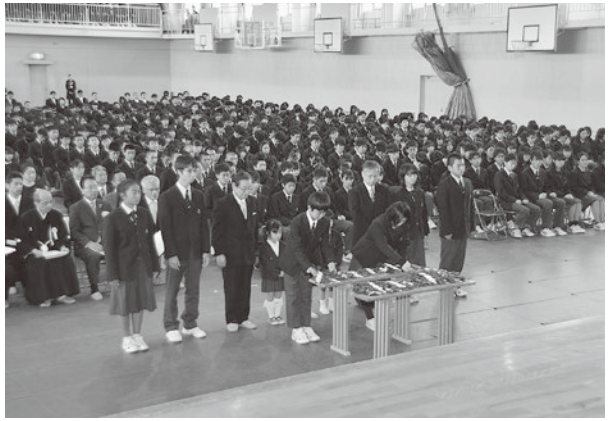
さて、金光教の教祖様は今から160年前、岡山県の小さな農村で「世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ」との親神様のお頼みをお受けになり、様々な難儀を抱えた人々の悩み、苦しみを実意丁寧な心をもって神に願い、救い助けてこられました。

そこに生まれた助かりの輪は年を追うごとに大きくなり、現在では海外にまで広がっております。

教祖様は、「人が人を助けるのが人間である」と仰っています。神様は私たち人間に、人を助け、共に支え合い、喜び合うことが出来る心をお与えくださっています。だからこそ、その心が響き合い、助かりの輪も広がっていったのだと思います。人をいたわり、思いやる心、支え合い喜び合う心は、未来への希望であり、この心はまさに本学園の「人をたいせつに　自分をたいせつに　物をたいせつに」という合言葉に通ずるものであります。金光学園はこの精神を育むことができる学校です。私は皆様に金光学園でこの精神を育てて頂きたいと思っておりますし、卒業後も人生の指針として大切にして頂きたいと願っております。

最後になりましたが、本日、永年勤続で表彰をお受けになられました方は、それぞれの持ち場にあって、実意に職務に尽くしてこられました。そのご努力に対し、心から敬意を表しますとともに、これからも元気に勤められますようお祈り

申し上げます。また、法人関係の方々をはじめ、校長先生、教職員の皆さまには、今日まで学校の運営・教育の上に、ひとかたならぬご尽力をいただいておりますことをあらためて厚く御礼申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



所願表明

生徒代表　宮本　将成

皆さんは、「本気のじゃんけん」というのを知っていますか？　私は3年間「本気のじゃんけん」をしてきました。これは私が所属する高校野球部が試合の始まる前に、本気のスイッチを入れる為に、メンバー全員で行っているものです。「本気のじゃんけん」というのは、勝っても負けても全力で喜ぶという「予祝」のことで、あらかじめ、祝うという字を書きます。成功者たちの脳内は、成功のイメージが先にあって、ワクワクしてしまうから本気になり、成功するという意味です。

今年の夏、高校野球部は、夏の県大会でベスト4になりました。しかし私たちの夢はやはり甲子園出場でした。その時、私たちが共有したことは、「夢を大切にする生き方」「仲間を大切にする生き方」でした。そして、本気で理想のチーム作りを考え、共に学び・共に成長し・共に勝つこと、自分達の無限の可能性を信じることでした。時には監督に自分達の考えを伝えたこともありました。監督は、私たちの話を傾聴し心血を注いで、「ピンチの時でも前を向く気持ちの強さをもつこと」などを指導して下さいました。メンタルを強化することで、「自分たちの限界はそんなものではない」と思い、試合に勝ち進んでいる自分たちの姿をイメージすることができるようになりました。

私は今年ほど卒業生の方々の金光学園愛を感じたことはありません。今年の3月、親戚の結婚式に参列した時のことです。同じ円卓には、卒業生の方が数名おられ、野球部の活躍だけでなく今日の金光学園の文武両道の素晴らしさや後輩たちの活躍をよく知っておられました。そして、とても楽しそうに自分たちの学生時代の話もしてくださり鼓舞激励して下さいました。

また、夏の大会では酷暑の日も悪天候

お届け

金光様、日々ご祈念いただき有難うございます。

私たちが通う金光学園中学・高等学校は、今年創立125年を迎えさせていただきました。

これまでお世話になったすべてのものに感謝し、お礼申し上げます。

在校生一同、本日の創立記念日を心からお祝いさせて頂くとともに、学園生全員がこれからの金光学園の発展に向けて、より一層努力していきますよう、決意を新たにしたいと思います。

特に、高校3年生におきましては、受験を目前に控え、追い込みの時期に入っておりますが、全学年の生徒ひとりひとりが健康で、また、それぞれの目標を達成することができますよう、お取次ぎをお願いいたしますとともに、今後ともお祈り添えをいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

有難うございました。

生徒代表　眞田　憲尚
山田　紋歌

の日も本当に多くの方々が毎試合球場に足を運び、誠心誠意応援してくださいました。アルプスからの声援が私たちの心に響き、活力となりました。引退後アルプススタンドで後輩たちの秋の大会の応援をしていると、私の名前を呼んで、

「僕らの時代には考えられんかったよ。夏の大会は楽しませて貰ったよ。ありがとう」

と声をかけて下さる方もおられました。

私は、夏の大会最後の日、応援に来て下さった方々に、

「自分たちがやり残したことは後輩たちがやり遂げてくれると思います。その為に自分たちも協力したいと思います」

と挨拶しました。実際後輩たちも、秋の大会でベスト4を成し遂げました。

今日金光学園は、創立125年を迎えました。この長い歴史の中で、多くの先輩方がこの金光学園で学び、社会で活躍されておられます。多くの先生方や先輩方の努力によって築きあげられてきた歴史あるこの金光学園で学べることの素晴らしさに日々感謝しております。そして、明治、大正、昭和、平成、令和と受け継がれてきた伝統の更なる発展を願い後輩たちへと繋いでいくことを誓います。

さて、今年も心に残る出来事が数多くありました。中でも10月に行われた「ラグビーワールドカップ」は、皆さんの記憶にも新しいことだと思います。20年前のワールドカップを第1幕とすると、第2幕の2000年のパシフィックリム国際大会では、5試合全敗。アジア大会の3試合では韓国にのみ勝利しただけでした。その後のワールドカップに向けた代表強化で重視されたのは、現実の試合に生きる科学的トレーニングでした。どういう方法で闘うのかをしっかり考え、相手チームを様々な角度から分析し、日本ラグビーの強化システムの在り方を情報システムに基づき具体化しました。また、

日本ラグビー協会は、百年構想というスポーツ文化の基礎整備の必要性とプランを提示しました。その頃選手がメディアから幾度となくかけられた言葉は、

「体格の差を考えたらよくやったよ」

でした。肉体的なサイズに限界をもち、ラグビー文化が根づいていない国が、外国の強豪を相手に本気で勝利を狙う為に

しなくてはならないことは、他国より優れた才能を磨くことでした。それは、少しずつタックルをずらして走るランニングスキルです。日本は、細やかな研究を重ねその才能を磨き、たった20年で決勝トーナメントへ進出できるチームとなったのです。

私達高校野球部も試合に負けると保護者の方から、

「強豪相手によくやった」

と言われていました。しかし私たちは本気で甲子園を目指していました。そのことを口に出して強く願い、保護者にも伝えました。やがて保護者の言葉かけも変わり、試合の映像を見せてくれたり、負ける気がしないと言ってくれたりするようになり、私たちの士気を高めてくれるようになりました。かけられる言葉や口に出す言葉で自分たちの意識が変わることを身をもって体感しました。そして感謝の気持ちをもち続けることが人として大きく成長することだと気づきました。

皆さんは、日本ラグビーのユニフォームの左胸に桜の花がデザインされていたのを覚えていますか？　桜の花は日本の国花ですが先に述べた予祝とも大きく関わっています。昔から日本では豊作を願って色々な祭りや祈願を行ってきました。

「未来の姿を先に喜び、祝ってしまうことで現実を引き寄せる」という意味で、桜の花びらを稲穂に見立て、春に花見を楽しんでいました。人生には、紆余曲折がありますが、感謝する気持ちをもち、毎年桜の花びらを楽しく愛でることができるよう願って、日々精進したいと思います。

素晴らしい学校生活を送ることが出来たこの金光学園での大切な友との生活も、高校3年生にとっては残りわずかとなりました。学園生の皆さん、叶えたい夢を実現するために、主体的に行動し一歩ずつ前進して行きましょう。夢はきっと叶います。

私たちは多くの方々に支えられて今を生きています。日々の生活を支えて下さる方々への感謝の気持ちを忘れることなく、これからも様々なことに挑戦し続けたいと思います。その先にはきっと心を揺さぶる感動が待っていることでしょう。最後になりましたが、金光学園のさらなる発展を願い、所願表明とさせていただきます。

道 (25)

金光 道晴

平和で豊かな日本での生活に感謝

この度のタイトル「平和で豊かな日本での生活に感謝」という言葉は、外国での生活を経験した人が使う言葉かもしれません。私は旅行などで外国へ行ったことはありますが、外国での長い生活を経験したことがありません。しかし、私が最近出会った人達の話や、この1か月間の度々のテレビや新聞報道などを通して、日本がいかに平和で豊かな国なのかを、改めて実感し、その有り難さをかみしめ心から感謝しているところでありますが、今回はそのことを書こうと思います。

初めは、11月18日にＪＩＣＡ（ジャイカ：国際協力機構）の事業で来日したアジアやアフリカ12か国からの15人の研修生が、金光学園を訪問し、交流した時のことであります。12か国とはラオス・ミャンマー・ネパール・パプアニューギニア・モンゴル・カンボジア・ベトナム・エジプト・エチオピア・ウガンダ・マラウィ・エスティワニです。

その交流会で私は主に次のような歓迎の挨拶をさせてもらいました。「金光学園は今、積極的に外国の方々と交流する機会を持っています。海外に出て外国での生活を体験すると、異国の文化・宗教・言葉・考え方などの違いや共通点を知り、国際理解を深め、自分の視野が大きく広がるだけでなく、外に出て初めて日本の良さが分かるようになることも多いと思います。その一方、外国から日本へやってきた人たちに学校にも来ていただき、出来るだけ交流の機会を持つようにしています。直接に会ってお話をしたり、聞いたりすることによって理解が深まり、相互に信頼関係ができ、一層友好の輪を広げることにつながっていくからです。本日の交流が、互いの理解や国と国の理解を一層深める機会になることを願っています」といった内容の挨拶をしました。

するとその直後、全くシナリオにはなかったのですが、マラウィという国から来た研修生の一人の青年が、私にキーホルダーと腕輪をプレゼントしてくれたのです。その両方ともに国名のマラウィ（ＭＡＬＡＷＩ）という文字が刻まれていました。「自分たちの国は小さな貧しい国ですが、是非知っておいて下さい」という青年の気持ちが強く伝わってきました。恥ずかしながら私は、マラウィとエスティワニという国のことはアフリカのどこにあるのか、どのような国なのかもよく知りませんでした。彼らは帰国してから、自国の発展のために一生懸命働いて、平和で豊かな国を築いていきたいという大きな夢を持っている大変優秀な若者たちばかりでした。彼らの国では現実には飲料水を手に入れる事は難しいし、多くの子供は学校にさえ通えていないということを話されました。私達は、食料や水に困ることはなく、誰しも等しく教育が受けられるなどと当たり前に思っていますが、この日本の現状は決して当たり前のことではないということを教えてもらいました。

２つ目の話は12月になって、我が家に届いた２通の手紙のことであります。「ＵＮＩＣＥＦ（ユニセフ：国際連合児童基金）」と「国境なき医師団」からの２通の手紙です。どちらも募金協力のお願いの文書でしたが、その内容は、①毎年何百万人もの幼い子供たちが、栄養不良や栄養不良を背景とする病気で命を落としていること。②世界中に１億４千９百万人いる栄養不良の乳幼児たちのこと。③内戦のため病気になっても医療援助を全く受けることが出来ず、多くの命が失われていることなどの悲惨な現状が次々に書かれており、その解決のための募金を要請するものでした。我が国では想像もつかない事でありますが、世界ではまだ内戦、貧困、病気などによって、今も多くの命が失われ続けているのであります。

そのような中で、先週の12月４日に、アフガニスタンで30年以上にわたって人道支援を続けてきた中村哲ドクターが、車で移動中に襲撃犯によって殺されるという大変ショッキングな事件が起こってしまいました。中村哲ドクターは、アフガニスタンで医師としての医療による支援をスタートに、医療だけではアフガニスタンの人々を助けることは出来ないとして、水路建設など農業支援をはじめアフガニスタンの病気に苦しんでいる人たちや、貧しい人々のために、人道的支援を続けてこられ、本当の意味での国際貢献をされてきた方でした。あれから１週間が過ぎ、急遽日本からアフガニスタンに行かれた奥様と娘さんと共に、８日、棺に納められたそのご遺体が日本へ帰ってこられました。新聞やテレビでは連日その事件の経過や、中村ドクターの功績を称えてその死を悼む報道が相次いでいます。本当に残念で、残念でなりません。なぜあれだけアフガニスタンのために貢献し、人道支援をし続けて来られた方が殺されなければならないのか？「なぜ？どうして？」という思い、「悔しい、悲しい、腹立たしい、無念な、残念な」思いばかりが募ってきます。

内戦が続く中で、中村さんはお医者さんでありながら、「飢えや渇きは薬では治せない。今アフガニスタンに必要なのは100の診療所より、１本の用水路である」と言い切り、アフガニスタンの人々の「１日３食の食事をできること」と「家族と自分の故郷で暮らすこと」という２つの願いを実現するために、医療支援とともに地元の人たちと一緒に、井戸を掘り、用水路を作り、東京ドーム３，５００個分ともいわれる広大な農業用地を作ったと伝えられています。アフガニスタンでは中村さんは国民全員から最も慕われ尊敬されている人の一人であります。先日アフガニスタンのアシュラフ・ガニー大統領も「私たちの国に最も大きな功績を残した偉大な人を守れなくて申し訳ない」と、首都カブール空港で航空機に棺を載せる列に自ら加わり、遺族にも会い、悲しみの中で棺に最後の別れをされていました。そして大統領はその意思を受け継ぎ農業支援事業を「ドクター中村」として続けていくことを表明しています。中村さんが目指してきた人道支援が着実に実を結んでいくことが、故人の遺志にかなうことだと思うのであります。しかし、報道されている内容を見る限りでは、現在のアフガニスタンは、内戦や飢えや貧困の解決までには、残念ながらまだまだ遠い道のりが予想されます。

これら３つの話で、今日の日本がいかに恵まれているか、いかに平和で豊かな国なのかを改めて実感いたし、私達が当たり前と考えている平和で豊かな我が国の状況が、決して当たり前ではないことをしみじみ感じたところであります。

メタセコイヤ

岡山イノベーションコンテスト2019　高校生の部　大賞を受賞

高3　渡辺　陽

11月23日に倉敷市民会館で開かれた岡山イノベーションコンテスト2019に後輩の和田君と参加した。発表内容は私たちの取り組んでいる白石踊の継承活動の手法の一つであるバーチャルアイドルを掘り下げたビジネスプランであった。バーチャルアイドルとはCGを用いて作成した美少女アイドルに白石踊を踊らせ、若い世代にアピールするものである。今回は現状取り組んでいる白石踊のバーチャルアイドル制作のほかに県内、県外の他の重要無形民俗文化財を対象に制作を引き受け、文化財バーチャルアイドルのムーブメントを起こすビジネスプランについて発表した。発表時間は3分と短かったものの、数えきれないほどの観客を前に発表できたためとてもやりがいがあったと感じている。

私達「白石踊り800年の伝統を受け継ぐ会」は、毎月の白石踊練習会や今回のようなコンテスト出場を共にする仲間を募集している。興味がある者や、殻を破って何かに挑戦してみたいと少しでも感じている者はぜひ探究授業で我々の活動に参加してほしい。

高2　和田　雄喜

11月23日に倉敷市民会館で行われた岡山イノベーションコンテストのファイナルに出場しました。この大会は、岡山発の新たなビジネスモデルを募集し、コンテスト方式で競うものです。私は三宅先生の指導の下、渡辺先輩とともに、伝統の重要無形民俗文化財である笠岡市白石島の白石踊りを、バーチャルアイドル「白石舞」にバーチャル空間で踊らせることで知名度を高め伝統の継承につなげる一方で、ここからさらに全国の伝統芸能とバーチャルアイドルの融合を行うという新規のプラットフォームビジネスを確立していくことを主題とする発表を行いました。発表時間が3分と短く自分の伝えたいことが全て伝えられませんでしたが、渡辺先輩と協力し、ユーモアを交えたプレゼンテーションを行った結果、高校生部門の大賞を取ることができました。

坂口　務 先生

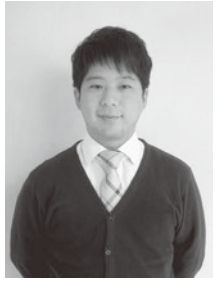
私学協会功労者表彰を受賞

坂口務先生が令和元年度岡山県私学協会功労者表彰を受賞されました。

「この度の受賞について、心から御礼を申し上げます。みなさまに支えられて何とかここまで勤めることが出来ました。これからも、頑張っていこうと思いますのでよろしくお願いします」と語る坂口先生のますますのご活躍をお祈りしています。本当におめでとうございます。

弓削　育之 先生

令和元年度第64回全国教職員卓球選手権大会　男子団体の部　ベスト4



弓削育之先生が令和元年度第64回全国教職員卓球選手権大会　男子団体の部でベスト4という好成績を収められました。

「ベスト4に入れたのは自分の力だけではなく、メンバー全員で支え合ったからです。感謝の気持ちを忘れず、これからも精進します」と語る弓削先生のますますのご活躍をお祈りしています。

ニュージーランドに留学

高2　笠原　麻由

私は、7月22日から8月19日までの4週間、文部科学省主催のトビタテ留学JAPAN高校生コース日本代表プログラムでニュージーランドに留学してきました。

今回の私の留学目的は、ニュージーランドで女性の地位が向上するためのヒントを探すことでした。私が女性地位の問題に興味を持ち始めたのは、非正規での女性労働者問題や医学部入試での女学生に対する点数差別などのニュースを度々目にし、女性蔑視の考え方がこの日本ではまだまだはびこっていると感じたからです。私は日本に根強く残る性差の考え方に苛立ちを感じ、この状況を変えられないかと考えるようになりました。

そこで、私が注目した国がニュージーランドでした。なぜならニュージーランドは、世界で初めて女性参政権を実現させた国であり、男女平等が当たり前に成り立っている国だからです。また、ニュージーランドは世界でも女性の地位が高い国の一つであり、何より首相が女性です。そんなニュージーランドには、学ぶべきことがたくさんあると考え、留学先に選びました。

ニュージーランドで現地の学校に通いながら、現地の高校生にジェンダーについてのアンケートの実施や、女性国会議員の方との対談、意見交換をしました。

しかし、アンケートでは、質問の意図への解釈が違っていたり、詳しく知らないからと答えてくれなかったりと、自分が思ったように上手くはいきませんでした。また、国会議員の方との対談では、英語の会話回答に、曖昧にしか理解することができず、自分の英語力の無さ、表現の未熟さを改めて痛感するものとなり

ました。このように、たくさんの悔しさは味わいましたが、今回の留学があったからこそ学べたものも多く、失敗から得た教訓は自分をひとまわり大きくしてくれたように思います。

ところで、留学中には、楽しいこともいっぱいありました。現地での異文化交流、アンバサダー活動として、現地の子供たちに折り紙や習字を教えたり、ホストファミリーに味噌汁を作り、日本の文化に親しんでもらったりしました。

また、学校の音楽の授業では、現地の学生の歌のうまさに圧倒され、ハカのダンスに魅了されました。そして、休日にホストファミリーに連れて行ってもらったニュージーランドの素晴らしい大自然の風景は、今も脳裏に焼き付いています。それと毎食後に出てくるニュージーランドのアイスクリーム、ホーキーポーキーは本当に美味しくて私の大好物になりました。

私にとって今回のこの留学は、本当に大切な実り多い経験でした。留学で得た一つ一つの学びを糧に今後の夢に向かって、しっかり頑張っていこうと思います。

活躍おめでとう

陸上競技部

沖縄インターハイ

高3　土屋　健太郎

2年生だった昨年の三重インターハイは8位、とても悔しい思いをしました。その日から沖縄インターハイに向けて、常に試合を想定しながら毎日の練習に取り組みました。試合当日、競技場には強風が吹き、風の影響をまともに受けてしまう槍投げには非常に難しいコンディションでした。3投の試技が認められる予選、予定通り1投で突破し迎えた決勝。風の影響で思うように記録が伸びずギリギリの記録でトップ8に残りました。残りの3投で順位を上げなければと深く考え込んでしまい、昨年の苦い記憶が蘇ってきました。その時、顧問の佐藤洋平先生から「表情が硬い!!　笑え」と声をかけてもらいました。この時「大事なことを忘れていた」と気づき、4投目に大きく記録を更新して3位に入賞することができました。この結果は家族や毎日共に練習する部員、アドバイスをくださる先生方のおかげだと強く感じています。金光学園の生徒として入賞できたことを誇りに、今後は世界で活躍できるように日々精進していきます。いつも応援有難うございます。

中学校少林寺拳法部

8月10日～12日、香川県坂出市で「第13回全国中学生少林寺拳法大会」が開催され、男子単独演武の部に中3の田淵春成、友田隼咲、中2の原田大地、甲田大礎、女子単独演武の部に中3の堤万菜の5名が出場した。田淵・友田・原田・甲田の4人が準決勝に進出、さらに田淵が決勝に進出し、第7位となった。

第13回全国中学生少林寺拳法大会に出場して

中3　田淵　春成

僕は8月10日から香川県で行われた「第13回全国中学生少林寺拳法大会」に出場しました。昨年に引き続き全国大会へ出場することができ、今年も決勝進出を目標に練習を重ねました。不安と緊張の中、予選、準決勝に挑み、予選では自分が今まで演武をした中で一番良い演武ができ、高得点が出てとても驚きました。決勝では1番でコートに入り、会場から「田淵春成ファイト」と仲間の声が聞こえ、とても力になりました。結果は7位。昨年より順位を上げることができて嬉しかったです。これも指導してくださった先生方や先輩方、応援してくれた家族や部員のおかげだと思います。これからも感謝の気持ちを忘れず、上位入賞を目指して、日々の練習に励んでいきたいと思います。

音楽部コーラス　中国大会

顧問　山路　真

8月に開催していたコンサートを昨年度から春に移動したため、夏の目標を何にするか、ということを部員たちと話し合った。強豪校は高3まで部員が残るなかで、高3抜きでコンクールに挑まなくてはならない。さらに、半分以上が中学生。今年に至っては3分の1が中学1年生。どうする。今まで参加したことがなかったコンクールに挑むということは、レベルの底上げや意識の向上など様々得るものがあると判断し、出場を決めた。出る以上は、他の団体と対等に戦いたい。新たな発声指導者をお招きし、基礎的な練習から曲作りまで今まで以上に取り組んできた。部員たちの練習に対する集中力や部活に対する思いはわずか3か月で大きく変わった。そして県大会。全国常連校となった岡山城東高校に敗れたものの上位3校に入り中国大会出場を決めることができた。学園コーラスとして、歴史的な瞬間であったと私は思っている。行事がたくさんある9月でも部員たちは集まったときに集中して練習をすることができた。そして9月末に行われた中国大会。県大会とは比べ物にならないレベルの高さに一瞬ひるみそうになる。しかし、4月以降積み重ねてきた練習を信じ、部員たちは今までで最高の合唱を披露することができた。結果は残念ながら銅賞。全国の壁は厚かった。しかし、部員たちはうなだれることなく、すぐに次に目を向けることができていた。今まで以上に強い視線で。間違いなく大きく前進した彼ら彼女らの演奏をぜひコンサートで皆さんにも聞いていただきたい。そしてこれからもたくさんの人に感動を届けられる歌を歌えるように努力していきたい。

第49回全日本中学校バレーボール選手権大会を終えて

中3　三好　大祈

僕は、全国大会を終えて色々な事を思いました。

特に心に残っているのは、金光学園中学校バレー部キャプテンとして試合に出させていただいた事です。

ここまで来れたのは、すべて自分の力でなく、チームの仲間一人ひとりのプレーや、絶対に勝つぞ！という思いがあった事。また、たくさんの人たちに助けられ、支えてもらったからこそ、全国大会という夢の舞台に立てたのだと思います。これは自分にとって、とても貴重な経験をさせていただいたと思っています。

試合が始まり、自分でもわかる位、とにかく緊張していました。悔いが残らないようにしっかりやらなければ、という一心で試合に臨みましたが、ブロックの時にもっと顎を引いてお腹に力を入れたら良かった、アタックは力いっぱい打ったけどアウトになってしまったなど、自分の中では悔いが残ってしまいました。この悔しかった気持ちを高校に上がっても意識しながら一生懸命練習に励みたいと思います。

僕は身長があまり高くないので、ジャンプ力を上げたいです。体感も鍛え、ぶれない体づくりをします。高校でも、レギュラーとして使ってもらえるように声を出すのはもちろん、上手くなるための練習は何でもしたいと思っています。

石井先生、亀山先生をはじめ、学園のOBの方々、保護者の方々、高校の先輩たち、チームメイトの応援、サポートがあったからこそ今の自分がいます。

高校に上がっても、たくさんの方々に感謝し、プレーで返せるように頑張りたいと思います。

全国大会で学んだこと

中3　相原　一皓

ぼくが今回の全国大会で学んだことは、気持ちです。気持ちの大切さは、自分が試合をしていても感じたし、他のチームの試合を見ているときも感じました。絶対に勝つという信念をもってプレーをし、点を取ると大きな声で喜び、点を取られるとチームを鼓舞するように大きな声を出す。このようなことがしっかり出来ているチームが強いチームだと思いました。バレーを始めた頃から言われ続けてきた、勝つという気持ちをもって常に大きな声を出すことの大切さを改めて学ぶことが出来ました。

ぼくは、全国大会という大舞台でこのような経験が出来たことに、とても感謝しています。

休日にもかかわらず、毎日バレーを教えてくださった指導者の先生方、毎日支えてくれる家族、夏休みの貴重な練習時間を割いてまで一緒に練習してくださった高校生の先輩方や忙しい中応援や練習に来てくださったOBの皆さんなど、たくさんの方々のおかげで全国大会に出場出来たことを、とても感謝しています。そして、大会当日試合に挑みましたが、予選敗退という結果に終わってしまいました。悔しいという思いもありましたが、その悔しさを忘れずに、これからの練習につなげていきたいと思います。

ぼくは来年から高校生になります。ぼくが今まで高校生の先輩方に教えてもらっていたのと同じように、今度は高校生として後輩に教える立場になります。人に教えられるようになるためには、毎日の練習を真面目にキッチリして、自分が今まで見てきた先輩達に少しでも近づけるようにします。そして、高校生になって、今回のように最後の試合で悔いが残ることのないよう、全国大会での2試合で学んだことをムダにせず、がんばっていきたいと思います。

全中を終えて

中2　徳永　一晟

今回の全国大会は、レギュラー一人ひとりが自分のするべきことを意識してプレイできていたと思う。

佐藤先輩、三好先輩、樹先輩や拳斗は、しっかりブロックをそろえていた。樹先輩は、侑生が試合に出た時には、しっかりスパイクを打っていて、セッターなのにスパイクも打てる事をずっとすごいと思っていた。佐藤先輩は、1年間ずっと誰よりも一番多くスパイクを打って決めていて、チームをエースとして引っ張ってくれた。僕は、次の自分の代で、こんな風になれたらいいな、と思った。

三好先輩と拳斗はライトの対角で、2人ともブロックもスパイクも決めていたが、三好先輩が決めた時は、誰がどんなプレイをした時よりも盛り上がっていて、チーム全体が元気になった気がした。キャプテンとして、試合中はみんなを盛り上げ、試合以外では、チームをまとめて指示を出す。そんなキャプテンがいたからこそ、全国大会出場ができたと思う。

レシーバーの相原先輩・優陽・耕大は、ブロックの横を抜けたボールやチャンスボールを、しっかりアタッカーが攻められるようにセッターに返していた。相原先輩は、ストレート側のフェイントや

ブロックアウトの球などを触り、コートに落とすことなく上げ、相手の得点を阻止していた。優陽と耕大は、クロス側の強打をあげていた。この三人のレシーブ力で全国に通用する攻撃の基盤ができていたと思う。

今回の全国大会は、ブロッカーがコースをしぼったり止めたりし、抜かれてもレシーバーがしっかりセッターに返球する。そしてセッターが良いトスを上げて、スパイカーが決めきる。これらがしっかりできていた。

全国大会は予選敗退となり、悔しい思いもしたが、楽しいバレーボールを1年間やってこられたのは、3年生の先輩のおかげだと思っている。

第74回国民体育大会を終えて

高3　川口　大城

私は、岡山県少年男子バレーボール代表として選ばれました。このメンバーは中学3年生の頃に全国都道府県対抗バレーボール大会で全国3位になった時の人達が多く、良く知っている人ばかりでした。練習では、コミュニケーションを通じて互いに指摘していました。

最初の目標は、去年果たせなかったミニ国体突破でした。数回の練習で大会に向けて練習し時間の部分で不安もありましたが、元気いっぱいで明るいチームへ成長することができました。その為、勢い良く良い雰囲気で勝つ事ができ、ミニ国体を2位で通過する事ができました。本国体まで、わずかな時間で集中し効率良く練習しました。本国では、埼玉県に勝ち、優勝候補の京都府と対戦し負けてしまいましたが、次に繋がる経験をする事ができました。バレーボールを通じて互いを知れる機会があり貴重な経験となりました。

バレーボール部　インターハイを終えて

高3　川上　理来

7月30日から8月3日にかけて開催された南部九州総体に、5年ぶりに5回目の出場をしました。今の高校1年から3年にとっては高校生活初めての全国総体という大舞台となりました。しかし、予選グループから強豪校と対戦する苦しい組み合わせの中、初戦は惜敗したものの、敗者復活戦では今までの練習試合で1度も勝利したことのない相手に勝利し、無事決勝トーナメントに進出することができ、勢いそのままにベスト16まで勝ち進みました。その中でも、初戦からの多くの応援がとても力になったと私は感じています。保護者の方々は勿論ですが、特に校長先生をはじめとする先生方、遠くの宮崎まで来てくれた友達の応援は大きな力となりました。全国大会では県大会などと比べ、得たものがとても大きく、これからの学生生活、人生にとって大切な財産となりました。関わって下さったすべての方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

WRO全国大会に出場

顧問　谷野　一忠

8月10日（土）岡山情報ビジネス学院で行われたWRO Japan 2019中国地区予選会で、ジェノベーゼ2号機（高1　祢屋希　高2　岡田敬生チーム）が、レギュラーカテゴリー（ミドル競技）で1位となり、全国大会出場へとなりました。

8月25日（日）に「第16回WRO Japan決勝大会 in 西宮」が関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス 総合体育館で行われました。前述の2名に加え、高2　池元司を加え、3名で出場しました。1セットだけのキットから時間内にロボットを組立、与えられた課題をクリアしていくものです。組立では、設計図等を使用することはできず、事前に作ったものを記憶だけで作らなければいけないので、なかなかうまくはいきませんでした。結果は予選リーグで敗退となりましたが、いい経験になったと思います。

高校少林寺拳法部インターハイ出場

日時：8月3日～5日
場所：KIRISHIMAツワブキ武道館（宮崎県宮崎市）

【結果】

女子団体演武の部

米村咲南（高3）・能勢采奈・塩谷明美・難波朋楓・髙橋南成子・原田麻未（高2）・虫明紗桜理・難波日名子（高1）が出場し、予選を突破し準決勝に進出したが、決勝進出はできなかった。

女子組演武の部

●塩谷明美・難波朋楓
●虫明紗桜理・難波日名子
以上の二組が出場したが、いずれも予選敗退

成長の糧となった

高2　能勢　采奈

私達、少林寺拳法部は8月3日から8月5日の3日間、宮崎県で行われた全国高等学校少林寺拳法大会に出場しました。結果は予選を突破し、準決勝に進むことができました。しかし、目標であった決勝に進むことはできませんでした。日々の練習の中では先輩・後輩関係なく思ったことを指摘し合い、よりよい演武を全員で作り上げました。全国大会という大きな舞台で先輩と一回でも多く一緒に演武ができて、嬉しかったですし、良い思い出となりました。私達高校2年生は、残された時間が限られていますが、後輩達に襷を渡すことができるよう、日頃の練習を忘らず、来年の全国大会では決勝で金光学園の名を残したいと思います。

活躍する卒業生

「魔法の呪文」

プロマジシャン　河田　晟生（高65回）

金光学園を卒業して早6年半となりました。在学中、毎回の発行を楽しみにしていたこのやつなみに寄稿する機会を頂いたことを大変嬉しく思い、筆を走らせました。

2019年3月、「The JAPAN CUP」という国内最大のクロースアップマジックの大会で、金賞と観客投票1位のダブル受賞を達成し、全日本チャンピオンの称号を獲得することができました。The JAPAN CUPは、同年度に行われた国内大会「Challengers' LIVE」で金賞を獲得したマジシャンの中から日本一を決める、名誉あるコンテストです。また来る2020年11月には、マジックのオリンピック「FISM ACM」に、日本代表選手として出場することが決定致しました。マジックを始めた頃からずっと憧れていた夢の舞台で戦えることに大変興奮しています。

さて、やつなみを読まれる皆さんに何をお話ししようか大変悩んだのですが、ここでは特に在校生の後輩たちに向けて、微力ではありますがエールを贈りたいと思います。

それは、「自分の本気エンジンを100%に！」です。これは大学院在学中に広報課からインタビューをお受けした際に言語化できた私の信念であり、どんなことに取り組むときにも成功や勝利を近づけてくれる、まさに魔法の呪文です。それではこの呪文の秘密をお話ししましょう。

その1「好きを見つける」。好きで好きでどうしようもないほど本気で夢中になれる「もの」「こと」を見つけてください。自分の中に「本気エンジン」を作るのです。ただ、それを見つけることはなかなか難しいですよね。そんな時はフットワークを軽くすることをお勧めします。やるかやらないか考えても、やらない理由ばかり出てきてしまうので、興味が湧いたらまずはトライ。やっているうちに好きになるかもしれないですからね。フットワークが軽ければ同じ時間でも多くの世界を見る事が出来るので、きっと皆さんの琴線に触れる「これだ！」という出会いがあるはずです。ハマらなければとパパっと切り上げて次の世界に行って良いのです。

また、このエンジンは何でもいいし、幾つでも良いのです。例えば、大学院時代の私の場合は、研究とマジックでした。研究は、次から次に湧き出る知的好奇心を心ゆくまで探求し続ける楽しさに夢中になり、マジックは、芸事としての底の見えない深みと、大会の勝敗が時には残酷に時には祝福として己の実力を教えてくれる緊張感に熱中しました。「二兎を追う者は一兎も得ず」と言いますが、私は「二兎くらい得てやるし三兎目も狙ってやるぞ」というくらいの意気込みでした。

その2「こだわる」。一度好きな「もの」「こと」に出会えたのならば、やるからには妥協を許さず、全力で楽しむ。本気エンジンを「100%に」ってことですね。「可能性は無限」という言葉がありますが、併せて「人生の時間は有限」ということも非常に重要だと思います。いつか必ず終わってしまうのです。時間は誰しも同じだけ過ぎていくので、100%のエンジンは50%のエンジンよりも必ず素敵な経験、考え、学びを与えてくれます。勉強でも部活でも趣味でもなんでも、50%で中途半端に取り組むのは人生の時間も労力もとてももったいない。思考停止してがむしゃらに頑張れば良いというわけではありません。常に頭をフル回転させ「今できる100%は何だろう」と問い、実践し続けるのです。

エンジンを100%に持っていくコツはまず目標を作ることです。「自分が本気でぶつかっても達するかどうかわからないなあ」くらいの目標が丁度いいです。闘志に火をつけてくれます。私の場合は、研究では「大学院を主席で卒業する」、マジックでは「学生の間に日本一を獲る」という目標を、己に課しました。すぐに成果が出なくても、目標があるおかげで努力の方向が見えやすくなります。マジックの大会に出場し始めて数年間は、何度も挑んでは負けてを繰り返してきましたが、その度ごとに「次こそ優勝する。何が足りなかったのか。克服のためにはどうしたら良いか」と考え、一歩一歩確実にブラッシュアップを続けることができました。途中で目標が変わることもあると思いますがそれもOKです。100%のエンジンに従って判断したことなら間違いありません。重要なのは一瞬一瞬で、常に「これに人生を懸けている」と胸を張って言えることです。

その3「繰り返す」。これが呪文の肝です。その2で、100%の本気エンジンで何かに挑めば必ず、素敵な経験、考え、学びを与えてくれる、と申し上げました。これらは50%の人は決して手にできない、100%のあなただけの宝です。誰にも真似できない唯一無二の財産なんです。実はこれが、次の目標に挑むときにあなたを驚くほど助けてくれます。100%で走り続けた本気エンジンはいつの間にか馬力が上がり、何かを実現したいときにはどうしたら良いかという「夢の叶え方」を自然に体得しているのです。これらは累積されるので、1回目より2回目、2回目より3回目と繰り返せば繰り返すほど、より難しいことを成し遂げられるエンジンに育っていきます。目標達成へのアプローチの精度が指数関数的に増加するイメージですね。

また、「信念あるところに人は集まる」ということも覚えておいてください。何かに100%で挑んだあなたを、周りの人は必ず見てくれます。すると、次の目標に挑むときにその人たちが力を貸してくれるのです。私も沢山の人の助けがあったからこそ、これまでの結果を残すことができたと確信しています。

呪文の秘密は以上です。「ちょっと試してみようかな」と思って頂けると幸いです。将来の自分が大きな何かを成し遂げられるように、今のあなたは今のあなたの目の前にある好きなことに、100%の本気エンジンで楽しんでみてください。

2ページに渡り述べさせて頂きましたが、皆さんに共有したいこと、皆さんと語り合いたいことはまだまだあります。いつかこの続きもお話できたらなと思います。みなさんがどんな本気エンジンを持って生きているかもお聞きしたいです。もちろん、ぼくのFISM ACMの結果も楽しみにお待ち下さい♪

略歴
2013年3月　金光学園高等学校 卒業
2013年4月　大阪府立大学 工学域 入学
2017年3月　大阪府立大学 工学域 卒業
2017年4月　大阪府立大学 大学院工学研究科 入学
2019年3月　大阪府立大学 大学院工学研究科 修了

2017年2月　JCMA主催Challengers' LIVE：銀賞
2018年8月　JCMA主催Challengers' LIVE：金賞、特別賞
2018年8月　UGM主催UGM Magic Convention 2018：特別賞
2019年3月　JCMA主催The JAPAN CUP 2019：金賞、観客投票1位
2019年9月　第19回ICMマジックコンベンション：FISM ACM 2020 日本代表内定

やつなみ保護者会のページ

あつかった〝ほつま祭〟

中3　保護者

例年なら我が子のクラスの展示をみたり、舞台をみたりと、好きな時間に学校へ来て、ほつま祭を楽しんでいたはずだ。だが今年は違う。私は役員としてほつま祭に携わっていた。

今年のほつま祭は、本当に暑かった。前日の準備に続き、当日もかなりの暑さで、暑さに弱い私は、少々バテぎみだった。

だがそんな暑さの中、私の担当である予約販売の持ち場では、何とも順調に時間が過ぎていく。共に動く仲間とのすばらしい連携プレー！　春に初めて出会った仲間も多いのに、何だろう、このずっと前から一緒に過ごしていたかのような空気感。これも我が子がこの学園で学び過ごさせていただいているからこその出会い。ご縁だろう。

もちろん、親として我が子の出し物もみにいった。我が子のクラスの出し物は、劇だった。我が子は演者ではなかったが、演者が生き生きと演技をしているのが感じられるのは、我が子が自分の仕事をちゃんとしている証拠だと思った。演者も裏方も一体となったこのクラスの〝熱さ〟。この学園で、いい仲間と出会い、日々過ごしているんだなと思わず涙した。

いつもとは違う角度からほつま祭を感じ、役員を引き受けていなければ感じる事のなかった我が子の成長。それに伴い、私も成長出来たと思う今年のほつま祭。

本当に今年のほつま祭は〝あつかった〟。つ、いつもなら終わるとサッサと帰っている。

今年は役員になり、今まで見えなかった事がこの半年の間にあり、我が子の出ていない競技にもいつの間にか力が入っている。一生懸命な姿は心に届く。あっという間に午前の部が終わる。やや雲行きが怪しくなりお昼休憩に雨が降る。このまま止まないかと思いきや午後からの競技になる頃には雨上がる。終わりまで天気が持ちます様にと祈りながら競技は始まる。一生懸命走る姿、最後まで走りきる姿、チームプレーが必要な競技、時には転げる姿に見入ってしまう。もっとビックリしたのは、宙を舞う姿。思わず歓声が上がり、我がチームが勝てば大歓声拍手。午後からは天気を気にして駆け足であったが、プログラムの最後まで無事終わる事が出来た。

雷の音がする中閉会式となる。泥々になった体操服の中に皆の顔にやり終えた達成感を感じ「暑い中今日参加した全員が誰一人気分悪くなったり怪我をする事なく終えた事に感謝します」とお話しを締めた校長先生の言葉に改めて子供達の頑張りに拍手をおくります。

高校体育会を見学して

高1　保護者

前日、明日はお昼から雨80％と聞いていて中学生の時大雨になった体育会が頭の中をよぎった。当日の朝天気になった。むしろ暑いくらい。平日の体育会なのに保護者の観覧席がいっぱいに。ちょっと意外だった。中学の体育会を思うとシンプル？　マスコットや応援合戦がない事に気づく。そうこうしていると体育会が始まる。誓いの言葉と共にスタート。

我が子の出番は、午前午後に1回ず

笑顔あふれる体育会

中3　保護者

今年は息子の中学最後の体育会。台風の影響で3日延期となりましたが、当日は爽やかな秋空の下、吹奏楽部の活気あふれる演奏とともに、力強い行進で始まりました。

たくさんある競技の中でも一番楽しみにしていた応援合戦。ほつま祭から2週間という短期間での準備、練習でしたが、マスコット、組旗、衣装、どれも素晴らしい完成度でした。

兄弟学級が団結し、励まし合い、全力で応援する姿に感動し、思わず身を乗り出し、歓声と拍手を送っていました。

3年生全員が出場したリレーは、仮装あり、笑いありと、選手も観覧席も楽しめるユーモアあふれる競技で盛り上がりました。

今まで走ることも踊ることも苦手だった息子が、仲間と協力し、笑顔で一生懸命に取り組む姿に胸がいっぱいになりました。

改めて、金光学園で学べる幸せを親子で感じた中学最後の最高の体育会でした。

やつなみ保護者会研修旅行

教養部　保護者

10月21日月曜日。教養部が企画する毎年恒例の研修旅行がありました。今回は香川県へのバス旅行でした。ほつま祭で協力したお仲間との研修旅行。とても楽しみにしていました。

とても嬉しいことに大好きな校長先生も副校長先生も来てくださりました。バスの中では、気心知れた人同士だったり、初めて話す人同士だったりですが、ほつま祭の話をしたり、子育ての悩み相談をしたりと時間を忘れて充実した時間を過ごしました。

あっという間に香川県に到着。琴平参道での散策をしました。女子旅ならではの食べ歩き、足湯、お買い物をして満喫しました。

そしておまちかねの昼食です。国指定登録有形文化財の郷屋敷で、日本庭園を眺めながら、会席料理、名物のうどんなどをいただきました。ここでも、保護者同士で子どものことや金光学園のことなどを語り合いました。

そして最後の目的地、父母ヶ浜（ちちぶがはま）に行きました。ここは干潮時に風がなく水面が波立たなければ、砂浜にできる潮だまりに天空を映し出す鏡のような光景を見ることができます。さらに夕方の頃には一層美しい光景が広がり、その美しい夕陽は「日本の夕陽百選」にも選ばれた事があります。フォトジェニックなカフェも並んでいて、立地を活かした素敵な観光スポットでした。ここでは、思い思いに過ごしました。写真を撮ったり、海をみながら語り合ったりしました。私たちは校長先生と並んで写真を撮ってもらいました。素敵な思い出になりました。

帰路に着くまでのバスの中では、金光学園はいいなぁ、やっぱりここに子どもを通わせてよかったなぁと話しました。子どもたち自身も楽しんで通わせてもらっていますし、私たち親もここで大切な保護者の仲間ができました。この出会いでいつもとても多くのことを学ばせていただいています。研修旅行でさらにこの繋がりを強く感じ、幸せな気持ちになりました。

「2019年 友愛セール」ご協力の御礼

保護者の皆様におかれましては、日頃よりやつなみ保護者会の活動に多大なるご理解とご協力を賜り、心から御礼申し上げます。

さる9月7日・8日、両日ともに晴れやかな天候のなか、記念すべき令和元年度のほつま祭が盛大に開催されました。友愛セールにつきましては、多くの保護者の皆様より多大なるご支援・ご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

本年度のほつま祭のテーマは「創れ青春～歩め令和～」でした。そのテーマの通り、生徒たちは展示や演技、模擬店など、それぞれに工夫を凝らしながら最高のパフォーマンスを目指し、持てる力をお互いに高め合いながら自分たちの青春を創り出していました。その力は生徒のみならず先生方、保護者の皆様方とともに大きなひとつの力となり、新しい令和の第一歩を築くことが出来たと嬉しく思います。

私自身としましては、本年度は昨年とは違い会長という重責を担う立場でありながら、果たして務まるのであろうか、皆様に喜んで頂けるのだろうかと、不安な気持ちでいっぱいでした。ひとりの力は微々たるものですが、OB・OGの方々をはじめ、保護者や役員の皆様、サークルの皆様、先生方のお力を頂きました。数ケ月前からの度重なる諸会合へのご参加、前日の準備、当日のお手伝い等、そして協賛・商品をご提供いただいた企業様、温かく受け入れてくださる地域の皆様、本当に多くの方々の支えがなければ成功はありえないと、身を以て実感し感謝の念に堪えません。誠にありがとうございました。

今年は、遊休品や協賛品等の減少など、時代の流れを感じ多くの不安要素がありましたが、それに負けることなく、イートインコーナーで今話題のタピオカを販売いたしました。新たなことへの取り組みは期待と不安でいっぱいでしたが、皆様に喜んで頂きたいとの思いで準備を進め当日を迎えると……予想以上の大人気！　早々に売り切れるという結果となり驚きの一言でした。課題もありましたが、受け継がれてきた歴史に加え、新たな時代の流行を取り入れることは良い経験となりました。今回学んだ改善点や受け継ぐべき良い点など、多くの事柄を次年度に引き継いで、さらによりよいほつま祭になることを願っています。今年は125年という節目の年。金光学園のさらなる発展を願い、気持ちも新たに役員一同引き続き頑張ってまいりますので、よろしくお願いいたします。

本紙面をお借りして、本年のほつま祭にご尽力頂いた全ての皆様に、心より感謝・御礼申し上げます。

やつなみ保護者会会長　甲田　博豊

平成31年度やつなみ保護者会総会記念講演
「常識を破って子どもを伸ばそう」

講師
陰山 英男 先生
陰山ラボ代表
一般財団法人基礎力財団理事長

はじめに

岡山は縁のある土地で、岡山大学を卒業しました。また、現在もRSK山陽放送のラジオ番組を持っています。今日は教育の常識とは何か、を話したいと思います。難しい問題をじっくり考えれば賢くなるイメージがありますが、やる気にもならないし、解けないと嫌になるでしょう。難しい問題に取り組むことは勉強が嫌になることなのではないでしょうか。

漢字の書き取り～山口小学校時代

子どもたちが漢字を覚えられないのは、漢字の書き取りをするからです。「漢字を10回書け」と言われると、10回書くことが目的となり、漢字を覚えず書く作業になります。漢字はたくさん書かせてはいけないのです。

ではどうするか。

「2～3分後にテストをする。漢字はこうです」と言います。すると一生懸命覚える。「明日も同じテストをする。絶対に同じ問題だから忘れないように。宿題でたくさん書く必要はないが、忘れない程度に書いておきなさい」と言います。するとまた満点を取る。1週間後にまた同じテストをします。これでもう忘れないでしょう。このやり方で子どもたちの頭の働きが良くなっていきました。

山口小学校時代には「読み書き計算」「早寝早起き朝ごはん」という、基礎的、基本的なことをを徹底することで難関大学に次々と合格したのです。

基礎・基本の学習

読み書き計算の反復学習ばかりやっていると、「今の時代は応用力、活用力の時代だ」と皮肉を言われます。けれど、基礎・基本をやって伸びるのは応用力・活用力なのです。ホームランバッターがホームランを打つ練習をせず、基礎基本を徹底しているのと同じことです。

ところがいま日本中の学校で応用・活用力のために応用・活用の学習をさせており、非常に危険なことだと思います。

教育の常識

教育の常識というのは、先ほどの漢字の問題と同じで、みんながずっと同じことをやっているからこれがいいのだろうと何の根拠もなく信じ込んで、思い込んでやっていたというだけなのではないでしょうか。今からよく言われることを5つ読み上げますので、何個正しいか考えてみてください。

1、日本人は創造性がもともと弱い。
2、東京大学は高額所得者の家庭の子でないと入れない。
3、学力は短期間に簡単にあがるものではない。
4、性急に学力を上げようとすれば、子どもの心は荒れる。
5、知能指数は生まれつき決まっていて、そう変わらない。

答えは全部間違いです。

○日本人は創造性がもともと弱い？→いいえ

理系のノーベル賞受賞者数は、日本人の受賞者がいなかった戦前から数えて今総合5位、戦後から数えると4位です。21世紀から数えると第2位です。

国際特許の件数でも、今や世界第2位の特許の輸出国なのです。

○東京大学は高額所得者の家庭の子でないと入れない？→いいえ

大体半分が高額所得者で多いということは言えそうです。しかし、年収450万円以下の家庭の合格者が10％から、多い年は20％くらいいます。ちなみに年収400万以下だと4年間授業料が無料です。

○学力は短期間に簡単に上がるものではない？→いいえ

陰山メソッドを導入している福岡県飯塚市の実践についてデータを示しながら説明。

○性急に学力を上げようとすれば、子どもの心は荒れる？→いいえ

陰山メソッドを導入している岐阜市立梅林小学校の実践では、校舎内外におけるけがが減り、遅刻がなくなり、全国学力テストの「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という問いに9割近くが肯定の回答をしました。

○知能指数は生まれつき決まっていて、そう変わらない？→いいえ

山口県山陽小野田市で「読み書き計算」「早寝早起き朝ごはん」を4000人の子どもたちに実践しました。平成18年5月の知能検査では平均値102だったのが、9か月徹底反復をして9か月後に調べると、平均値111まで上がりました。

時間の管理

簡単なことを高速にやらせることが大事です。本は黙読でなく音読させることが大事です。勉強というのは一定時間あたりにどの程度の作業量をこなせるのかということであり、それに必要なツールは「時計」です。目標時間を設定してさっさとこなす、時計とストップウォッチとキッチンタイマーが一体となった商品のオススメは「スタディタイム」です。

勉強とは集中する練習

勉強とは脳を上手に使うトレーニングなのです。だらだら分数を勉強していると、学んでいるのは分数ではなく「だらだら」を身に着けていることになってしまいます。そして、親は子どもを集中させようとして緊張をさせてはいけません。子どもがリラックスし、集中力を得るために、親や教師は常に笑顔でいましょう。

漢字の習得

小学校6年生に小学校6年生の漢字のまとめテストをやって、全国平均は60点です。ほとんどの子どもは3～4割の漢字が書けない状態で中学や高校へ進学します。どうすればいいかというと、漢字は1年分まとめて学習する。3年生は3年生、5年生は5年生の漢字のどんなテストをやっても80点になると、すべてのテストの点が上がってきます。漢字をやれば国語の点が上がるのではなくて、すべてのテストの点が上がってくるのです。

田川市の漢字の全部の児童の平均点は89点、倉敷市のある小学校の特別支援学級の子どもたちにも大きな効果がありました。

百ます計算

百ます計算は少しやっただけでもものすごく伸びます。重要なのは「百ます計算」の前の「十ます計算」で、「＋7」「－7」などの苦手なところを絞り込んで徹底的に鍛えることです。実は勉強ができるできないの最も重要な分かれ目は1年生です。1年生の時のくりあがり、くりさがりが苦手なまま成長していくことが、中学、高校、実社会でおもしになっています。

おわりに

岡山県では陰山メソッドによる実践が今花開きつつあります。いろいろなご縁の中でこうした実践がさらに広がり、高まり、また地域社会でこの金光学園様が発展していきますことをお祈りしまして、今日の講演を終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

グローバル研修

韓国・仁川英語村研修

仁川英語村研修を終えて

中1　高橋　里桜奈

金光学園を受験した理由の1つが積極的にグローバル研修に参加する事だったので、仁川英語村研修をとても楽しみにしていました。また小学校の時に英語学童で英語を習っていたので、自分がどれだけ英語を話せるのかを試してみたいと言う気持ちもありました。仁川英語村研修では普段体験することができないような特別なことができました。英語を使って理科の授業をしたり、調理実習の時間にワッフルを作ったりしました。調理実習の時間にお互いの国のラーメンを食べたのですが、その時に韓国の子たちがカップラーメンのふたを扇形に折って、左手に持ち、受け皿として冷まして食べていました。みんなそうしていたので驚きました。日本ではないような習慣を学ぶことができました。また韓国の友達と仲良くなれたことがとても嬉しかったです。もちろんお互いの言葉はわからないので英語でコミニュケーションをとります。私がちょうど研修に参加した時は日韓関係があまり良くなかったのですが、韓国の友達から積極的に話しかけてくれました。仲良くなった韓国人の子と2人で仲良くしていた時に、今年、日本に来ると言うので「今ニュースでいろいろあるけど家族はみんな日本が嫌いじゃないの?」と聞いたところ「全然そんなことないよ日本はとても素晴らしいし大好きだよ」と言ってくれてとてもうれしかったです。私は実際に韓国で出会った友達と一緒に感じた気持ちを大切にしたいと思いました。英語村の先生方はみんなフレンドリーで、とても良い先生ばかりでした。授業はみんなが楽しくできるように工夫していました。授業でカードゲームを使って英語を学んだり、韓国で昔から伝わる遊びを教えてくれてとても楽しかったです。授業以外でも交流できてうれしかったです。最初はなかなか英語が出てこなくて、ジェスチャーを使ったりしていたけど、帰る頃には言いたいことが言えるようになっていたので1週間でこんなに変わるんだな、とびっくりしました。これからさらに英語力をつけて来年もぜひ英語村研修に参加したいと思います。

韓国・春川女子高校姉妹校交流

充実した6日間

高1　小松原　奈月

「帰りたくない」私は韓国にいる間ずっとそう思っていた。それほど1日1日が楽しくて、充実していたからだ。

私は韓国に行く前、日韓関係のニュースを見て、ホームステイ先の人たちが日本に対して良いイメージをもっていないのではないかと心配していた。だが、実際韓国に行ってみると、そんなことはなく安心した。むしろ日本が大好きでとても歓迎してくれた。

韓国の学校では、美術や体育をしたり韓服体験をしたりとどれも印象に残っている。特に韓服体験では、たくさんの色の中から好きな色を選んで、ホストシスターに手伝ってもらいながら着た。制服の上から来たので着心地は分からなかったけれど、鏡に映る自分を見て、少しだけ韓国の文化に触れることができたような気がした。

5日目の百合祭では、金光学園では見たことのないような模擬店がたくさんあり、金光学園でもあったらいいなと思った。百合祭でとても印象に残っているのは訪問団での出し物をした時だ。あまり練習ができていなくて、ちゃんと踊ることができるか心配だった。いざその時がくると、ものすごい歓声が聞こえた。私は吹奏楽をやっていて歓声をもらうことが多いが、今まで聞いたことのある中で一番大きな歓声だった。それを聞いた時、感動すると同時に、私達はこんなにも歓迎されていたんだと感じた。

今回、この日韓関係の中で行くことができたのは本当に良かったと思う。こんな時だからこそお互いのことを良く知り、刺激し合って得ることができたことはたくさんある。この交流をここで終わりにせずに、ずっと続けていきたい。

日韓の懸け橋になるために

高2　藤本　もえ

私たち15人は韓国にある春川女子高校を訪問しました。私自身このプロジェクトに参加するのは2回目でした。今回このプロジェクトに参加した理由は、日韓の関係が悪い中、どのようなことを学ぶことができるかと、自分の韓国語をどれだけ発揮することができるのかを確かめたかったからです。

実際、渡韓してみると、テレビで見たようなものはなく安心しました。私のホストファミリーのみんなも私を家族の一人のように温かく迎えてくれました。2

年前は、日本語がよく話せるホストシスターでその日本語に頼り切ってしまいました。だから今回は、相手の日本語に頼らず、自ら韓国語で積極的に話すことを心がけながらこの6日間を過ごしました。実際に韓国の方と韓国語で話すことですぐに距離も縮まり、すぐ仲良くすることができました。私の話す言葉が伝わった時、本当に嬉しかったし、幸せでした。

そしてこの6日間の中で私の夢もはっきりと決まりました。日本語の先生です。私のようにその国が好きでその国の言葉を学ぶ子たちを応援したいと思ったからです。日本語を教える先生にも話をうかがい、とてもすてきな仕事だと改めて思い私の夢になりました。

この6日間で本当に自分を成長させることができました。自信にもなり、改めて韓国という国が大好きになりました。今、日韓の政治の中ではとても悪い仲になっています。その中でも若い子供たちが交流することは本当に大切だし、必ずこれからの未来に良い光がさすと思います。この交流の中で少し日韓の懸け橋を作れたと思います。この橋をこれからも作りつづけ、日韓の仲がもっと良くなることを私は望みます。

韓国で過ごした1分1秒が私にとって本当に幸せな時間でした。それは、この交流が10年も続けてこれたこと、計画してくれた先生やJTBの方々、家族やホストファミリーのおかげです。みなさんに感謝の気持ちを持ち、この交流をたくさんの人に伝え、これからにつなげていくことが大切です。

もっと韓国語の出来を上げてもっと成長した姿でまた韓国にもどっていこうと思います。

私のAnother Sky Korea

日韓の懸け橋に

高2　中村　祐衣

私が今回の姉妹校交流で一番印象に残ったことはたった1週間で別れ際に涙が止まらなくなるほど固い絆が生まれたことです。韓国に行く前は私の両親が渡韓することをとても心配していました。しかし実際に韓国にいってみるとホストファミリーやクラスメイトも温かく私を受け入れてくださり、とても安心しました。そして私はパートナーの子とだんだん仲良くなっていきました。私のパートナーのスアは日本語サークルの部長をしていて日本語がとても上手でした。私が日本語で話してもそのほとんどを理解してくれました。そこで私もスアに負担をかけないように独学で勉強していた韓国語を話せるように頑張りました。カタコトの韓国語でも上手だと褒めてもらえたことはほんとうにうれしかったです。

現代の情報にあふれた社会において、テレビや新聞で日韓の悪い関係を思わせるようなニュースが飛び交っています。しかし、画面の中だけの情報を鵜呑みにすることなく、現地の人々の声に耳を傾けてほしいと思います。私たちの交流は始まったばかりであり、これからも絶えることのないように努めていきたいです。

また、今回一緒に韓国に行ってくださった引率の先生方、春川女子高校の先生方、ホストファミリーの皆様、そして両親には貴重な体験をさせて頂けたことにほんとうに感謝しています。

台湾グローバル研修

人の温かさと活気を感じた7日間

2019年　台湾グローバル研修

7／30―8／5

Ying Hai High School ホームステイと授業交流

樹人医護管理専門学校での交流

台南・台北での企業研修&観光 etc.

盛りだくさんの7日間!!

7月30日（火）～8月5日（月）の7日間、中2～高2の生徒34名と引率3名は、台湾グローバル研修で台南と台北を訪問しました。今年初めてとなるこの研修は、昨年6月にYing Hai High School（私立瀛海高級中學）の29名の生徒さんを受け入れ、授業体験や部活動体験、交流会などで友好を深めたことがきっかけとなり、実現しました。

今回の研修のメインとなる、7月30日（火）～8月1日(木)は、Ying Hai High Schoolの生徒さん宅にホームステイをして、授業体験や台南市内の観光をしました。その後は、樹人医護管理専門学校の学生さんとの交流、台北の観光をして、台湾の文化を体験しました。

7月30日（火）

早朝5：45に学園集合、出発式。高2山本楓夏さんの生徒代表挨拶。生徒34名引率3名そろって、元気に出発。関西空港には予定よりも早く10時前に到着。出国する人たちの多さに驚きました。12時発のチャイナエアラインで、いざ台南空港へ。飛行機から降りると、蒸し暑い空気に包まれ、台湾に来たことを実感しました。入国手続きを終えて、バスでYing Hai High Schoolへ。6階建ての大きな校舎と緑の芝生の校庭に、これから始まる交流プログラムに大きな期待を抱きました。早速、数百人の生徒が待つ講

堂へ。思いがけない大がかりな歓迎式に驚くとともに、大変嬉しくも感じました。歓迎式は、Ying Haiの生徒2名が英語で司会をしてくれました。教員代表の挨拶、高1中藤涼果さんの挨拶、記念品の交換等の後、Ying Haiの生徒さんがバンド演奏やダンス、ジャグリング（中国ごま）などのパフォーマンスを披露してくれました。学園生は、日本紹介のプレゼンと「ヤングマン」を振付をしながら歌い、会場は大いに盛り上がりました。約1時間の歓迎式はあっという間に終わって、ホストシスター・ブラザーが、名前を書いたプラカードを持って受け入れる学園生を迎えに来てくれ、それぞれホームステイ先に向かいました。

7月31日（水）

Ying Hai High Schoolは夏の補習期間ですが、朝は7：25から始まり、16：40までの8コマ+朝自習と、さすが台南一の進学校、しっかり学習しているようです。

この日学園生は、スクールバディの教室で、1日授業体験。様々な教科の授業を受けました。国際科は少人数でのAll English の授業で、物理やビジネスの授業に学園生も奮闘していました。一般のクラスでは、アットホームな雰囲気の中で、Ying Haiの生徒さんと楽しそうに授業を受けていました。化学の実験の授業は、台湾の授業コンテストで優勝した実験を、Ying Haiの生徒さんが英語で手順を説明しながら進めており、レベルの高さも実感しました。また、ピクニックの授業もあるそうで、校庭でシートを広げ、タピオカミルクティーを飲んだり、マンゴーなどのカットフルーツを食べたりしているクラスもありました。

国際科の All English 授業

picnic の授業

化学実験の授業

8月1日（木）

この日はガイド役のYing Haiの生徒さん数名と、終日台南市内観光に出かけました。台南市は、日本でいう京都のような街で、歴史の古い街だそうです。国立

台湾歴史博物館、林百貨店、安平老街など、主な名所を回りました。昼食は、いわゆるツアーでは行かないような街中のお店で食べ、貴重な経験もできました。

8月2日（金）

3日間お世話になったYing Hai High Schoolの皆さんとお別れの日。朝の集合から、すでに涙目の生徒もいました。送別式では、高2山本楓夏さんの挨拶に続き、高2細川愛莉さんが代表として修了証と記念品を受け取りました。その後、校庭で記念撮影をして、多くの生徒さんが私たちのバスを見送ってくれました。本当に温かい、おもてなしの心のこもった受け入れに、学園生全員が感動しました。これからも継続して相互交流をして行くことを約束して、Ying Hai High Schoolを後にしました。

次に向かったのは、樹人医護管理専門学校。日本でいう高等専門学校のような学校で、医療関係の学科のほか日本語学科もあり、その学生さんとの交流を中心に行いました。学校に着くとまず、学生さんが横断幕をもって私たちを出迎えてくれ、記念写真を撮った後、校舎内に入りました。

歓迎式の後、キャンパスツアーで広大な校内を案内してくださいました。この日のメインは、グループ学習。台湾に来て4日目。自分の気づいた日本と台湾の違いについて出し合い、なぜ台湾でそうなのか、逆に日本ではなぜそうなっているのか、仮説を立て、その話し合いの過程を模造紙に書き出して、最後に発表するものでした。「なぜ冷たい水がレストランにないのか」「学校で体操服で過ごしているのはなぜか」など、素朴な疑問を専門学校の学生さんにぶつけていました。

発表後は、台湾と日本の遊びを紹介し合い、実際にして交流を深めました。年齢は少し上の学生さんが多かったですが、主に日本語で交流したので、楽しく交流できたようです。生徒代表挨拶は、歓迎式で高2加賀陸馬くん、閉会式で高2船橋怜那さんが行いました。

8月3日（土）

台南市で過ごす最後の日。この日からは、学園生のみでの研修になります。午前中は台南空港近くの奇美食品幸福工場でパイナップルケーキ作りと工場見学。パイナップルケーキは、台湾では有名で、お土産の定番。調理室で作り、自分の作ったケーキの試食もしました。説明は中国語でしたが、ガイドさんの通訳とテレビに映し出される先生の映像を見て、比較的簡単に作ることができました。その後、奇美美術館に行き、世界中から集められた絵画や美術品、楽器などを見て回りました。

昼食をとった後、間に合うかどうかヒヤヒヤしましたが、無事台南駅から台湾新幹線に乗車、一路台北に向かいました。台北ではまず、蔣介石の顕彰施設である中正記念堂に行き、施設見学と記念写真。大きくてきれいな建物に驚きました。この日は台北での花火大会のため、宿泊ホテル周辺が交通規制がかかるとのことで、早めにホテルに入りました。夕食は、ホテル最上階のレストラン。20時からの花火大会が正面に見える位置で、大満足の夕食でした。

8月4日（日）

忠烈祠、故宮博物院、龍山寺、そして「千と千尋の神隠し」の舞台ではないかといわれる九份と、終日台北観光。台湾の歴史と中国や日本との関係を肌で感じた研修でした。

8月5日（月）

台湾での最終日。11：30のホテル出発までは自由行動。ホテル周辺の店に最後の買い物に行ったり、散策したりと、思い思いに台湾を満喫しました。台北桃園空港に移動し、7日間お世話になったガイドの陳さんと別れたあと、出国手続きを済ませて一路関西空港へと向かいました。関空からのバスの中で、この7日間の台湾グローバル研修について、1人ずつ総括を言う時間を持ちました。Ying Hai High Schoolでのホームステイや授業交流のこと、台南や台北で触れ合った台湾の人たちのこと、自分自身の英語力や積極性のことなど、1時間以上かけて、全員が語りました。それぞれに思いの詰まった言葉を紡いでいました。22時前に学校に到着し、帰着式では高1宮本桃花さんの挨拶で研修を締めました。

8月末に、台南市滞在中にお世話になった旅行社からの修了書が届きました。その中には、Ying Hai High Schoolと樹人医護管理専門学校から、これからも交流を続けていきたいとのメッセージも添えられていました。昨年6月の来校時の交流、そしてこのたびの台湾グローバル研修での交流が、新たな絆を育んできています。研修に参加した第1期生34名だけでなく、金光学園のグローバル教育の機会に積極的に参加している生徒の皆さんのおかげで、少しずつ広がってきています。

台湾グローバル研修で学んだこと

高2　中林　海人

この台湾グローバル研修は、自分のこれからの人生においてかけがえのないものになりました。

1日目朝早くに学校に集合し、出発式で副校長先生が「宝を探しに行こう」とおっしゃられました。そして始まった研修。関空から台南空港に着いて外に出ると、とても暑くびっくりしました。入国審査を済ませ、いよいよ瀛海高校に行きました。学校に着くと、たくさんの生徒から歓迎を受けて、とてもびっくりしました。そしてホストファミリーと会いました。ホストファミリーはとても優しくて、車に乗るとき、タピオカミルクティーを渡されました。さすが台湾だなと思い

ました。最初は緊張して話せませんでしたが、ホストファミリーがフレンドリーに話しかけてくれたおかげで、すぐに仲良くなることができました。日本にとても興味を持ってくれていて、日本について聞かれたり台湾について教えてもらったりしました。観光では、赤崁楼や祀典武廟などに連れて行ってもらい、台南の文化や歴史に触れることができました。さらに僕が乾燥タピオカを買いたいと言うと業務用スーパーに連れて行ってくれて、とても安い価格でたくさんの乾燥タピオカを買うことができました。家では、ホストファミリーの友達が来て、一緒に日本のアニメを見たりしました。

次の日は、瀛海の授業を体験しました。クラスの人たちはとても気さくでたくさん話しかけてくれて、日本のことが好きな人ばかりで、連絡先を交換したり、とても仲良くなりました。しかし、彼らはとても英語が上手で、彼らの英語を理解できないこともあり、自分の思うように話せなくて、悔しい思いもしました。この悔しい思いを忘れず、今後の英語の勉強につなげていきたいと思いました。

3日目は、瀛海の生徒と台南を観光しました。前の日に仲良くなった人がいたので、コミュニケーションがとりやすかったです。台湾歴史博物館や林百貨店、国華街など、台南の観光スポットを回ることができました。

そして次の日にホストファミリーと瀛海の生徒たちとお別れをしました。彼らはとても別れを惜しんでくれました。また台湾に来たときには会おうと言われ、僕はまた絶対台湾に行って、彼らと再会しようと強く思いました。そのときには英語を話せるようになって、再会できるように頑張ります。その後樹人医護管理専科学校に行き、日本語学科の生徒たちとグループで日本と台湾の違いについて討論し、発表しました。この討論はＡＯ入試などにとても役立つと思いました。

5日目は、台南から台北まで新幹線で行きました。新幹線の出発時刻ギリギリになってしまうアクシデントが発生しましたが、みんなで協力し、スーツケースを運び、間に合うことができました。台北に着くと、三日間で九份や龍山寺、故宮博物院など、台北の観光スポットを回ることができました。

僕はこの研修で自分の英語力の乏しさを痛感し、今までの自分の英語の学習を見直したいと思いました。今までは、テストのためだけに英語を勉強していましたが、これからは英語を使えるように頑張ります。また、台湾の文化に触れることによって、日本の良さ、台湾の良さ、どちらの良さも知ることができました。この一週間は、自分の人生において大きな経験になりました。この経験を活かしてこれからの学校生活を頑張ります。

台湾研修に参加して

高2　尾形　実咲

この研修があると知ったとき、魅力的で絶対に参加したいと思った。私は海外へ行ったことや自分から何かに参加したいと思ったことはなかったが、初めて自分から挑戦し、大きな経験となった。

初めの3日間はホームステイだった。初めはとても緊張し、不安だった。だが、ホストシスターは積極的に話しかけてくれて、すぐに打ち解けることができた。夜は、寝るまで日本のことや台湾のことを話したり、私が行きたいと言った場所に連れて行ってくれたり、とても楽しい時間を過ごせた。

2日目は、学校の授業を1日体験した。私のクラスでは、すべて英語の授業で、日本の高校では学ばないビジネスや心理学を学んでいたことに驚いた。しかも生徒も授業中すべて英語で話し、日本のように先生が一方的に話すだけでなく、同じくらい生徒も積極的に発言していたのは凄かった。日本と他の英語を母国語としない国の英語教育の違いを実感した。

台湾の学校の子たちと3日間過ごす中で、文化の違いを知ったのはもちろんだが、自分の英語力の低さをとても痛感した。自分が話したいと思っても、単語が分からなかったり文がすぐに作れなかったりして、話すことに苦戦した。どれだけ外国について知りたかったり学びたかったりしても、話せないと何も始まらないと思った。もっともっと話したり学んだりしたかったと後悔もある。これを機に、自分の英語の勉強を見直す機会になり、定期考査だけの勉強をしてきたが、話せる英語ができる勉強をしていきたい。

この7日間は大変なこともあったが、私にとって本当に大きな経験となった。初めて海外の友達もたくさんでき、今でも連絡を取り合う仲になり、もっと英語を勉強して会いに行きたいと思う。また、この研修で世界の広さを感じ、海外で働きたいと思うようになった。本当にこの研修に参加して良かったし、私にとって大きな経験となった。

学びへの一歩

高1　赤沢　梨吏

「この研修に参加してみよう」私は台湾研修の募集を見て決意した。私は高校生になり、自分で意欲的に何事にも挑戦しようという志を持っていた。その第一歩ともなるのが今回の台湾グローバル研修だ。この研修に参加することが決まり、私の初の試みがスタートした。私は、説明会や事前オリエンテーションを通して、何か1つでも多く学びを得て帰るという目標を自分の中で立てた。現地でのホームステイは、今回の研修で自分にとって一番の気掛かりな点でもあったが、ホストファミリーとのコミュニケーションは、自分の持っている最大限の英語力がどれだけ通用するのかを試す良い機会でもあった。

まず、ホストファミリーが私を受け入れてくれたことに感謝している。私は対面してすぐ打ち解けた。中学生のホストシスターは英語、ホストマザーは英語混じりの中国語で、コミュニケーションは主に英語だった。私はこの研修に参加す

る前の事前準備として、英会話を勉強していったので、コミュニケーションをとるのに活かされた。ホームステイは、ホストシスターとのサイクリングから始まった。台湾の夜市にも連れて行ってもらった。初めて口にした台湾料理は、「蚵仔煎（オアツェン）」で日本でいうオムレツだ。予想以上に美味しかった。私はホストファミリーに知らずのうちに心を開いていた。最終日には、ホストファミリーと夜遅くまで時間を忘れるほど楽しく談笑した。3日間という短い間だったが、私を気遣い最高のおもてなしをしてくれ、本当に嬉しかった。

今回のグローバル研修はYing Hai High Schoolへの訪問も目的だった。私たちと同じ中高一貫校だが、規模の大きさに驚いた。高校1年生のクラスで授業体験をさせてもらった。数学は唯一英語の授業で、私は授業中前で発表することもあったが、内容を理解することに精一杯だった。また、クラスメイトが私を観光に連れて行ってくれ、一人ひとりが親切に話しかけてくれ、とても嬉しかった。Ying Haiの生徒さんは高校生ということもあり、英語力がしっかり身に付いていた。会話を聞き取ることはできても、私の英語力で返事を返すことに限度があり、自分の英語力のなさを痛感した。もっと自分に英語力が身に付いていれば、会話も弾んでいたと思う。

研修に参加する事前の目標を、こうして台湾グローバル研修を終えて今、改めて考えてみた。万国共通の英語は、今後必要性があると強く感じ、英語に対する意識が一層高まった。また、自信を持って積極的に自ら行動に移すことによって、多くの経験を積めば視野を広げることができる。最後に、国境を越えても人と人との心は通い合い、時を共に過ごすことで分かち合えると思った。この研修に参加し、貴重な経験をすることができた。今後の高校生活で、今回の研修で学んだことを活かしたい。

私にとっての宝箱

高1　大森　望実

まず初めに、私が台湾研修に参加しようと思った理由は、英語を話す練習をしなければならないが、日常でそのような場面があまりないので、研修に参加し、自分を見直す機会になれば良いなと思ったからだ。

飛行機に乗り台湾に着いて、まずはYing Haiに行った。日本ではありえないくらいの学校の広さにまず驚いた。そして歓迎式を終え、ホストファミリーと対面したとき、とても笑顔で話しかけてくださった。とても嬉しかった。台湾での食事は日本とは味も全てが違い、新しい体験ができた。学校での体験授業では、同年代とは思えないほどの英語力を間近で見て、驚きを隠せず、自分の英語力のなさを実感し、危機感を覚えた。ホストファミリーと話すときも学校の生徒さんと話すときも、どうにかして自分の気持ちを伝えなければならないという思いでいっぱいだった。研修に参加する前にも英文法の勉強をしてきたが、いざというときに実践できず、これが普段から勉強をやっている人とやっていない人との差なんだと思い、現実を見た。学校での授業が終わり、家に帰ると台湾で有名な夜市に連れて行ってくださり、とても楽しい夜を過ごさせてもらった。そして交流しているうちに、トイレットペーパーのことや服装、家の造り、交通など、様々な場所で日本とは違う異文化を経験できた。最終日、ホストファミリーと分かれるのはとても悲しかった。私がバスに乗ろうとすると、生徒さんが1つのお守りをくれた。泣きそうだった。国が違っても気持ちは一緒だと感じた。

台湾4日目は、樹人医護管理専門学校へ行った。グループ討論のとき、もう少し積極的に行ければよかったと、今更後悔している。あの短時間で、あそこまで仲良くなれたのはとても良かった。

そして後の3日間もとても良い観光になった。やはり一番興味を持ったのは九份観光だ。映画の中で見たことのある景色が自分の目で見られる日がくるなんて、思わず興奮してしまった。台湾でしか食べることができない小籠包や北京ダックもとてもおいしく印象深い。

今回の研修では、本来の目的の異文化体験をするだけでなく、どうすれば英語を使って、相手に自分の考えを伝えられるだろうかなど、自分自身で色々考えて行動する力が少しは身についたと思う。そして学校で生徒さんの素晴らしい英語力を見て、今まではテストで点数をとればよいと思っていた自分の考えが、実践できる勉強をしようと自分を見つめ直すことができた。大きな宝箱を持って帰れたと思う。

この研修に参加することができたのも家族を含め、様々な方々のおかげだと思っている。この感謝を忘れず、日々の一日を大切に過ごしていきたい。

台湾研修に行って

中3　平松　莉奈

私が台湾研修に行こうと決意したのは再募集の時でした。今思えば、この研修に参加できて本当によかったです。

台湾に行くにあたって、私が一番心配していたのはホストファミリーのことでした。その人たちのことを全く知らないし、言語が違うのにどう過ごせばいいんだろう。会話すらできないかもしれない、と。私は不安でいっぱいでした。そんな中いざ行ってみると、確かに1日目は会話もあまりできず、日本に帰りたいと思ったりもしました。けれども2日目、私はよく使う挨拶やありがとうなどの言葉を中国語で言ってみました。すると、ホストファミリーと少しなじめた気がしました。そしてどんどん打ち解けられて、最後の日は涙を流して別れました。次はぜひ日本に来て欲しいです。

私が2日目からホストファミリーとの時間を楽しめたのは、きっと台湾の学校インハイハイスクールに行ったからだと思います。学校に行く時も緊張していましたが、そこには私と同じ年の生徒がたくさんいて、みんなフレンドリーで優しかったです。校内を案内してくれたり、簡単な中国語を教えてくれたりしました。学校の生徒たちとはすぐ仲良くなれたので嬉しかったです。少ししか学校に行けなくて、なごり惜しかったけれど、私はとてもよい経験ができたと思いました。

これらのことを通して私が強く思ったことは、英語は大事だということです。伝えたいことが伝えられない、返事の仕方がわからないなどのことばかりでした。だからこそ、会話が通じた時は本当に嬉しかったです。私の不慣れで、かたことの英語を熱心に聞こうとしてくれた台湾の人たちにお礼を言いたいです。これからもっと英語を勉強して、いろいろな体験をしてみたいです。また台湾にも行きたいと思います。

台湾グローバル研修を終えて

中3　小野　さくら

7月30日から8月5日までの7日間、今までに経験したことのないほど充実した日々を過ごすことができました。昨年の韓国仁川での研修にはなかったホームステイやインハイハイスクールでもたくさんの思い出ができました。ホストファミリーとの食事のときや日常会話では、わからない英単語が多かったので、もっと英単語を覚えようと思いました。

インハイハイスクールの生徒さんたちは、小学校2～3年生には英語がスラスラ話せるようになっていることを聞いて驚きました。将来、就職する時に、英語が話せることが必要だからということでした。このことを聞いて、私自身の考えが甘かったことを痛感しました。これからは、普段の会話でも英語を取り入れていこうと思います。会話の中で使った英語はよく覚えていますし、使うたびに思い出すので、記憶に定着しやすいということにも気付きました。ホストファミリーにも手紙を書きたいと思います。

台湾の文化で印象に残ったのは外食とトイレでのことです。ホストファミリーとの外食は夕食3回、朝食1回でした。1食のお値段が安くて量も多くて驚きました。トイレでのことというのは紙を流さないことです。日本の水洗トイレの快適さを実感できた体験だったともいえます。

最初の3日間は、頭をフル回転させて英語を聞いて話しました。頭の中が英語でいっぱいになったからか、ホームステイの自分の部屋で探し物をするとき、

「Where?」

と、独り言を言っている自分に気がついて面白かったです。日本では、この3日間のような「聞く」「話す」という体験はなかなかできないので大変でしたが、よかったと思っています。もし日本でも「聞く」「話す」体験ができるなら参加していきたいです。授業にももっと取り入れてもらえたら嬉しいです。

最後に今回の台湾グローバル研修に参加させてくれた両親、そして、お世話になった先生やJTBの方、ホストファミリーや台湾のお友達に感謝して、この7日間の体験を今後に役立てていきたいと思います。

中学 体育会

体育会を終えて

1年2組　瀬尾　稀俊

僕が体育会で出場した種目はむかで競争と400メートルリレー、そして応援合戦だ。

むかで競争ではAグループでスタートから3分の2までは1位でいることができた。後半の他のチームの追い上げにはびっくりして、なんでそんなに速く走れるんだと思ったけど、1位でいるときはとても気持ちが良かった。

400メートルリレーは閉会式前の最後の種目で、しかも、僕は3走で応援席前を走るのでとても緊張した。結果は、最下位で振るわなかったがとても楽しく走ることができたので良かった。

応援合戦は体育会で一番力を入れている種目で、そこで2組は優勝することができた。

1年生は3年生の先輩方に結構迷惑をかけたけど、本番に向けて放課後も練習してきたので正直優勝は想像できなかったけどとても嬉しかった。

閉会式が終わった後に団長やチアが泣いていたので、こんなに気持ちを入れて僕たちにダンスを教えてくれたりしていたんだなとびっくりした。だから僕は、一つのことにこんなに一生懸命練習して勝って嬉し涙が流せる先輩方がとてもかっこいいと思った。

最後に僕たちが3年になったら今の3年のように1年生を引っ張っていける頼もしい先輩になりたい。

最高の体育会

1年3組　福島　帆菜

今日の体育会で、たくさんのことを学びました。体育会は初めてで、とても緊張して、大縄跳びやクラス対抗リレーで皆の足を引っ張ってしまわないかなと心配でした。でも、皆が応援をして心が一つになり、大縄で全力を出しきることができました。

応援合戦では、力いっぱい声を出したり、一生懸命踊ったり、練習のときよりもがんばることができました。練習のときは、1年生が3年生を困らせていると聞き、先輩に迷惑をかけてしまっているなと思いました。来年は後輩ができるので、今日の反省をいかしていきたいです。

そして、一番うれしかったことは、学年で1位ということです。皆の心が一つになったからこその結果だと思います。

綱引きでも1位だったり、大縄跳びでも1位だったりと、練習の成果が存分に発揮できたと思いました。

そして、私たちがこうやって体育会をすることができたのは、いろいろな人の協力があったからこそだと気づきました。両親は、砂だらけになった体操服、靴を一生懸命きれいに洗ってくれました。疲れ切って家に帰って来ても、いつも明るく優しく接してくれました。学校の先生は、初めて体育会に挑む私たちを、丁寧に指導してくれたり、自分たちの体育会をよくするために叱ってくれたりしました。ほかにも、朝早くから放課後遅くまで残って体育会のために尽くしてくれた人がいました。

私も、これから皆のためにいっぱい尽くして、皆からお陰でこんなよい体育会や行事ができたんだと言われるように、何事にも一生懸命取り組みたいです。

最高の体育会

2年1組　山口　奈津美

「明日が本番だから、頑張ろう」

前日にこの言葉を聞いて、もう明日が体育会なのかと驚いた。ほつま祭が終わり、体育会までの準備期間は昨年とは違い、本当に短かった。しかし、私は一番最高なものを本番でできたと思う。

最高な体育会にできたのは、やはり一日一日の努力だと思う。特に私が頑張ったのは朝練だ。中学2年生から応援合戦の朝練ができるようになる。でも、私は早く起きることが苦手だ。いつもの30分も早く起きなければならなかった。「嫌だな」と感じていたけれど、中学3年生の最後の体育会を楽しく終えられるように中学2年生が頑張らないといけないと思った。そう考えられるようになってから、朝練に本気で取り組んだ。応援合戦の本番に、これまでの努力が十分に発揮できて、すばらしいものになったと思う。

最高によかったのは応援合戦だけではない。私は、長縄も良かったと思っている。1組は、練習の時になかなか跳ぶことは出来なかった。他のクラスは、30回以上飛べているのに1組だけ10回以下ということがほとんどだった。そして、「だれが引っかかったの」という言葉がよく聞こえるようになっていた。しかし、だんだんと「どんまい」とか「頑張ろう」など励ましの言葉に変わっていった。また、跳べる回数も増えていった。そして本番、17回という結果になった。他の人からすると、たったの17回に思えるかもしれない。けれど、私にとって最高の17回だった。

私にとって、準備の時間も含めてこの体育会は本当に最高なすばらしい思い出だ。中学2年生は、3年生と1年生にはさまれる重要な立場だということも知ることができた。来年、中学3年生として1年生、2年生を引っ張っていけるように、頑張りたい。

体育会のお弁当

2年4組　蒲生　幸香

私は体育会が楽しみだった。なぜならお弁当のメニューが全て私の大好きなものになるようにお母さんにお願いしていたからだ。時々何もないときに「明日オムライスがいい！」とお願いすることもあるが、おかずのメニューをお願いしたことはなかった。だから私は体育会がとても楽しみだった。ちなみにお願いしたメニューはそぼろとミートボールと野菜とハンバーグだった。お母さんに「ミンチばっかり！」と笑われてしまったが私にとってこのメニューは最高にうれしかった。そして前日に一緒にお買い物に行ってお肉コーナーに行くと、なんとミンチが売り切れていた。「ミンチが売り切れることなんてあるんだ」とお母さんは言っていた。お弁当のメニューの主役はそぼろなのだ。だから絶対にそぼろがい

い。私のそぼろへの熱い思いを伝えると夜遅く家に帰ってからまたミンチを買うためだけに行ってくれた。そのおかげ(?)か4組は学年の部兄弟学級の部で優勝することができた。私は「来年もお弁当のメニューはこれにしてね」とお母さんに言った。お母さんは「覚えとるかなぁ。こんなこと作文に書かんでよ」と言っていたが書いてしまったのだから仕方がないだろう。私が「もう書いちゃった」というと「もうっ」と笑っていたので、勝手に書いていいと解釈した。その日のお昼ご飯はみんなと小学校のときの給食の話をした。ちなみに私の小学校のお昼ご飯のときのあいさつは「手を合わせましょう。美味しい給食をいただきます」「いただきます」だった。学校によっていろいろなことが違っていて楽しかった。体育会の感想文がお弁当の感想文になってしまった。なんだかんだ良い体育会になった。来年はデザートもお願いしようかなとまだまだ先の体育会も楽しみにしている。

感謝と感動の体育会

3年2組　楠間　永梨

今回の体育会は、中学校生活最後の体育会でした。私は体育会と言うのは小学校の時から嫌いでいつもあまり楽しめてないなというふうに感じていました。でも今回についてはとても楽しく、感動もしました。私は初めてマスコット係になりました。竹というのはよく「しなる」のですが、無理に曲げようとすると跳ね返ってきてとても危険でした。それに組み立てるときは締め方がゆるかったりして何度も何度もやり直しました。2週間と言う短い期間の中でみんな気持ちが焦っていて、意見が対立することもあったけれど、3学年が協力して作業をして立派なマスコットを作り上げることができました。特に後輩の積極的な働きかけがそのことに大きく関わっていると思います。応援団のダンスについても、たった2週間で作り上げたものだとは思えないほど、どのクラスも素晴らしいものでした。幹部の人たちが相当頑張ったんだなと思いました。私は組旗を振りながら後ろで見ていましたが、衣装係がいろんな工夫をして作った素敵な衣装で動きがきれいにそろったダンスを踊っているのを見ると、感動以外に何もありませんでした。これこそ、一致団結と言う言葉にぴったりだと感じました。2組は全体の成績では第3位だったけど、獲得した賞が1番多いクラスでした。

最後に、団長、チアからの言葉の中で、頼りない私たちについてきてくれてありがとうと言っていたのですが、全くその逆で、時間のプレッシャーがありながらも優しい言葉でみんなを導いてくれたことに私が感謝をする方だと思いました。

台風の影響で延期となってしまったけど、少しでも練習ができたため、逆に良かったなと思います。この体育会で身に付いたクラス、学年の団結力を今後の中学校生活に活かしていきたいです。

個性を発揮し、補い合う

3年4組　中務　雄嘉

中学校生活最後の体育会を終えて思った事は、人それぞれの個性を出し合い、補い合う事で、より早く、より良く、物事を成功させる事ができることです。本来なら、ほつま祭と体育会の期間はもう少し長いはずでしたが、今回は間の準備期間が短かったので、間に合うのか不安でしたが、どのクラスの応援もマスコットも完成させることができたので安心しました。

今年は、4組と5組が2学年しかいなくて、僕は去年5組で2学年しかなく、何の賞も取ることができなかったので、少し不利に思えてしまいましたが、今年は、総合優勝を取ることができたのでうれしかったです。残念ながら応援合戦の賞は取ることができなかったけれど、一生懸命演技ができたので、悔いはありませんでした。

僕は100メートル走で補欠だったのですが、一人休んでしまい、走ることになりました。結果は最悪でしたが、皆が元気づける言葉を言ってくれました。自責の念が少し和らいだのでうれしかったです。

3年生全員で行うリレーでも、それぞれの個性が発揮されていたので、それも面白く楽しかったです。

このように自分に足りない所は皆で、皆が足りない所は自分が積極的に補うことで、団結してきれいにまとまれるということを大事にして、社会でも頑張って団結していきたいと思いました。3年生最後をしめくくる良い体育会でした。

ほつま祭

来年へのわくわくが止まらない

中1　藤井　豊

僕は、オープンスクールも体験していないので、どんな学園祭なのかわくわくしていた。僕のクラスは「@学園宇宙ステーション」がテーマで、その中でも僕の担当は、宇宙の歴史と、惑星別の重力について調べた。惑星別の重力についてはクイズを考えて、惑星別の重力をペットボトルで作って、違いを体験できるコーナーにした。準備に時間がかかったが放課後残ってくれるグループの人と協力して完成した。当日は色々なお客さんが来てくれたが、緊張してあまり上手に説明できなかった。しかし、家族が来てくれた時には、自分の言葉で説明できて、「よく頑張って調べたな」と言ってくれたのでうれしかった。弟は、ロケットやしおりをもらっていて、使ってみたいなと言っていた。僕も宇宙について、少しでも知れて良かった。

他のクラスや学年、文化部の展示も飾り付けや、クイズにこっていて、おもしろかった。特に天文部の宇宙展はぼくたちも宇宙について調べただけに、興味深かったし、クイズは難しかったけど、知っていたこともあって全問正解し、天文部が撮った月の写真をもらった。すごくきれいだった。

2日目は、コーラスや吹奏楽などの見学をした。コーラスは男子も女子も声がすごくきれいに出せてそろっていたし、同級生が活躍しているのを見て、普段とはちがう一面を知ることができた。「KOP」は審査員のアドリブがおもしろくて大笑いした。とても楽しくて充実した2日間を過ごせた。来年のほつま祭もわくわくしている。本当に楽しい初めてのほつま祭だった。

ほつま祭で学んだこと

中2　三宅　喜生

僕は今年ほつま祭実行委員でした。実行委員に立候補しましたが、初めはできるかどうか正直不安でした。実際に活動してみると、先輩や友達などの協力もあり、楽しく活動することができて実行委員になってよかったと思います。そして、実行委員として、ほつま祭を通して大切だと思ったことが3つあります。

1つ目は、「協力する」ということです。誰かがシフトの時間に間に合わなくても臨機応変に対応し、別の誰かの代わりにシフトに入ったり、少ない人数でも協力して接客したりすることができ、協力することの大切さを感じました。

2つ目は、「全力で楽しむ」ということです。ほつま祭実行委員として、お客さんを楽しませることも大切ですが、まず自分が楽しまなくては相手を楽しませることはできないなと思いました。お客さんもそして自分も楽しむからこそのほつま祭だと思いました。

3つ目は、「精一杯取り組む」ということです。大変な仕事や片付けなどあまりしたくないようなことでも、自分からすすんで行動することで達成感を得ることができました。また、実行委員だからこそあいさつは精一杯しました。お客さんへのあいさつや親切な対応も大切な仕事だと感じました。

今年のほつま祭のテーマは「創れ青春～歩め令和～」でした。このテーマに込められた思いのように、実行委員やクラスのみんなと協力し、楽しい青春の思い出を作ることができました。また、ほつま祭を通して団結力が深まったように思いました。この団結力をクラスだけでなく兄弟学級へと広げ、体育祭も協力して成功させたいです。

中学最後のほつま祭

中3　神原　知弥

今回のほつま祭は僕達にとって中学最後のほつま祭でした。その中で一番思い出に残っているのは、クラスで取り組んだ劇です。僕達3年5組は「嘘屋」という劇をしました。僕は初めてキャストをすることになり、この長いセリフを覚えられるだろうか、舞台できちんと演じることができるかなど、たくさんの不安がありました。そのため、学校だけでなく家でも何度も練習をして本番に臨みました。劇本番が始まると、直前まで心にあった不安や緊張がすっと消え、その代わりに「この劇、絶対成功させるぞ」という気持ちでいっぱいになりました。劇は無事終わり、たくさんの方々から温かい拍手をいただきました。その時僕は達成感を強く感じるとともに、みんなでこの劇をすることができてよかったと心の底から思いました。

結果発表では、3年5組の劇はなんと1位を取ることができました。まさか1

位になるとは思っていなかったのでとても嬉しかったです。また劇の後に、何人もの方から「劇、良かったね」といった言葉をいただき、この劇をすることができて良かったと改めて感じました。

この舞台を通し、本番のために一生懸命練習、努力することの大切さを学ぶだけでなく、クラスのメンバーとの絆を深めることができました。1位を取れたこともちろん嬉しかったのですが、それよりもこの3年5組のみんなでとても良い舞台を作り上げることができたことが僕にとって何よりも嬉しかったです。この思い出、経験を大切にし、これからも色々なことに励んでいきたいと思います。

不安が安心に

高1　岡部　美桜

授業が毎日7時間あるため、ほつま祭の準備に取り掛かるのがとても遅かった。模造紙を終わらせる日にちが近づくにつれて、私は不安でいっぱいだった。このペースでちゃんとほつま祭当日に間に合うのか、こんなことばかり考えていた。だが、全員が締め切りの日を守ってくれたり、教室や廊下の装飾はそれぞれの役割でグループに分かれて計画してくれたりなど、私の不安な気持ちが一気に安心に変わった。正直、初めは「無理かな」とたくさんマイナスなことを思っていたけど、ほつま祭の日が迫ってくるうちに準備や企画をしていくのが楽しくなった。そして当日。本格的に準備を始めてからほつま祭当日までがあっという間だった。このクラスメイト、担任、副担任の先生でほつま祭ができるのは一生に一度だと思い、少し寂しい気持ちもあったが、いろいろなことを前向きにとらえて仕事を務めた。中学生の時にはあまり経験がなかったが高校生になるとクラス外でも仕事がある。だが、それも思っていた以上に楽しかった。このほつま祭で一番うれしかったことは来てくださった方々が笑顔で「ありがとう」と言ってくれたことだ。「ありがとう」と言われる度に、もっと頑張ろうという気持ちが込み上がってきて、最後まで楽しく接客することができた。この1年5組のメンバーでほつま祭を成功させることができたのが本当に良かった。

ありがとうを伝えたい

高2　浅原　果歩

「雨は時として、あなたを狂わせる」「雨」という言葉を聞く度に、あの言葉が頭に浮かぶ。サスペンスの演劇は私にとって初めての経験だった。ということもあり、最初は私の中で、やる気と不安が混ざり合っていた。助監督として、監督を支え、みんなを支えていこうと決心し、この演劇に臨んだ。

案の定、サスペンスの世界の壁は高く、一筋縄ではいかなかった。一番難しいと感じたのは、犯人とあすかの狂気を感じさせる演技の指導だ。自分が実際に演技を見ても、理想とは違い、言葉で説明や指導をするのはとても難しかった。また、監督がいない時は、自分がクラス全員をまとめなければならなかった。上手くまとめることができない日もあり、監督という仕事の難しさをとても感じた。同時に、監督という存在の大きさを知った。大道具、音響、照明、全てを合わせることも、キャストへの指導も苦労の連続であったが、毎日練習を重ね、日に日に上達していき、徐々に仕上がっていくのが嬉しくてたまらなかった。

本番当日、最後の確認を終え、私達は舞台へ向かった。始まる直前、私はできる限り一人一人に最後の言葉をかけ、舞台袖に下りた。劇中は、成功を祈り、横から見守った。劇は見事今までで最高のものとなった。終えた後のみんなの笑顔はとても輝いていた。

最高の演劇で私達は見事グランプリを獲ることができた。本当に嬉しい気持ちでいっぱいだった。これから毎日当たり前にあった劇練習がなくなると思うと、寂しい気持ちにもなった。2年6組で、このメンバーで一つのものを創ることができて良かった、本当に良かった。今、みんなに伝えたい。「ありがとう」

高2修学旅行　北海道コース

●1日目

6組　久津間　歩夢

6月10日、修学旅行初日、私たちは朝7時にほつま体育館下に集合した。私は早起きが苦手で寝ずに来たのでとても眠かった。

出発式を終え、広島空港に向かった。飛行機を待っている間は特に何もなく、友達と話して時間をつぶした。1時間くらい経ってようやく飛行機に乗った。機内からは海のように広がる雲が見えた。

長い空の旅を終えて北海道に到着した。私が思っていたほどは寒くなかった。ただ風がほんの少しだけ冷たかった。はじめに行ったのは赤レンガ倉庫だ。とてもおしゃれな町並みで、まるで海外にいるようだと錯覚した。店には美味しそうなお菓子が売っていたので、家族への土産に買った。

だんだん暗くなり、少し肌寒くなってきた頃に、皆でバスに乗って函館山の夜景を見に行った。日本三大夜景の一つが見られると思ったが、あいにく天候が悪く、一面霧に覆われていてまったく景色は見えなかった。とても残念だったが、お土産ショップを見て楽しむことができた。

6組　三宅　一輝

私の修学旅行の思い出は機内から始まる。乗り換えがあり、とても疲れたということだ。やっとのことで飛行機を降りた時、想像していたより寒くなかったのが印象に残った。

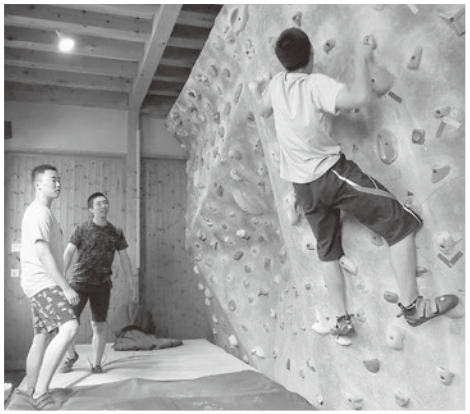
自主研修の場所に行くためにバスに乗ったが、その道中、信号機が縦であることに気づいた。理由は明白。雪が積もっても見えやすくするためであるが、妙に気になって仕方がない。

自主研修の場所は函館である。班ごとに別れて行動するのだが、私たちの班は赤レンガ倉庫に行った。外見は文字通りの倉庫なのだが、中はとてもオシャレだった。いくつもの店が立ち並び、とても倉庫とは思えないものであった。函館駅にも行った。とても大きく、学生が多数いる印象を受けた。

ホテルでの夕食を済ませた後、函館山の夜景を見に行った。バスが山にさしかかると車内の電気が消えた。私たちはこれを利用して恐い話をした。これが大いに盛り上がった。山頂では気温がとても低く、濃霧により視界が真っ白であり、何をしに行ったのかよ、と思いかけたが、それも一つの思い出だと考え直した。何はともあれ、修学旅行の良いスタートを切ることができた。

●2日目

6組　船橋　怜那



この修学旅行では、いつもの生活では感じることができない自然に触れることができた。

2日目の五稜郭公園では五稜郭タワーに登り、展望台からは五稜郭の星形や函館市街がよく見渡せた。館内にある五稜郭について学べる展示スペースやエレベーター内のプロジェクションマッピング、チケットの絵など、歴史を感じさせるものが多くあり、五稜郭の歴史を知る上で意義深いものだと思った。

ニセコでは、私はラフティングをした。初めての体験なので不安だったが、ガイドさんの丁寧な説明を受け、同じ班の人たちと息を合わせて漕いで川を下って行くうちに、安心して楽しむ気持ちになった。激流を下ったり、立って漕いだりしてスリリングな体験をすることができ、忘れられないひと時となった。

2組　井上　千聡

北海道2日目はニセコへ行った。そこにあるNACセンターで、私はラフティングという6～7人で乗るボートを選択した。ネパール人のインストラクターに漕ぎ方を教わってから川へ入った。ドライスーツを着ていたが、足先に穴が開いていて、入った瞬間、足から水が入ってしまう。とても冷たかった。

ボートに乗って少し慣れてくると、インストラクターや他のチームのボート同

士でオールを使って水面をたたき、水を掛け合って遊んだ。特にインストラクターさんは、どのようにたたいたら水がたくさん飛ぶかを知り尽くしていて、私たちは水しぶきをたくさん受けてずぶ濡れになってしまった。

川の中間になってくると、急な流れになったり、岩に激しく当たったりして、初めはボート内で悲鳴がたくさん上がっていたが、すぐに慣れて笑い声でいっぱいになった。

川の最後では、少し深い所でボートの上に立って、全員で川へ落とし合った。ドライスーツは着ていたものの、やはり隙間から水が入ってしまい、全身びしょびしょになってしまっていた。そうしているうちに、いつの間にかゴール地点に着いていて、時間が過ぎるのがとても早く感じた。

今回のラフティングでは、日常では味わえない楽しく貴重な体験ができて良かった。

●3日目

3組　川上　紗加

修学旅行3日目は、小樽・札幌の自主研修だ。様々な場所に行き、様々な体験をして盛りだくさんだった。

私たちはまず三角市場に向かい、海鮮丼を食べた。初めての本格的な海鮮丼は名前の通りとても新鮮で驚いた。

札幌への移動は電車を使った。車内から見えた海は水平線がどこまでも続いていて、改めて北海道の広さを実感した。それからテレビ塔に向かった。展望台からの眺めはとてもよかった。

そして、私たちは晩ごはんを松尾ジンギスカンという店で取った。グループのみんなが、ジンギスカンを食べるのは初めてだ。親や友達から生臭いと聞いていたけど、実際に食べてみると、初体験の味と食感でとてもおいしかった。

この日は初めてのことばかりで、あっという間に過ぎた。北海道の食文化や土地を肌で感じられて、とても楽しい1日だった。

●4日目

4組　玉川　直樹

私たちは7月13日、北海道修学旅行の4日目に植松電気や旭山動物園など、さまざまな場所へ行った。

植松電気では植松努社長の講話を聞いたり、モデルロケットの製作をしたりした。植松さんの講話の中で、今でも心に残っている言葉がある。それは「やればできるという経験をすれば人は変わる」という言葉だ。今まで嫌いなことから逃げることが多かった私にとって、この言葉はひどく胸に刺さった。逃げているばかりではどうにもならない。失敗しても

いいから挑戦することが大切で、自分自身も成長できるのだと思った。

旭山動物園ではサルやシロクマなど沢山の動物を見て、普段は感じることのできない動物の生態を知ることができた。

この他にも、修学旅行ではたくさんの経験をした。これらの経験をもとに、将来に向けてさまざまなことに挑戦し、努力し続けようと思った。

4組　藤波　和丸

私たちは4日目に植松電気と旭山動物園に行ってきた。植松電気では植松努さんの講演を聞き、模型ロケット作りをした。私はいつもネガティブ思考で、何事も上手くいかないと思ってしまうのだが、植松努さんは「人は失敗することで成長する。失敗を避けてはいけない」という言葉を私たちに掛けてくれた。この言葉を聴いて私は「何事も失敗してしまっても、これは全て成長に繋がるのだから、次こそは頑張ろう」と、ポジティブ思考でこれからの学園生活を送ろうと思った。

ロケット製作では、友達と協力し合って素晴らしい機体を作った。打ち上げの時、工作が苦手なので上手く飛んでくれるか不安だったが、無事に飛んでくれてとても感動した。

旭山動物園では、とても可愛い動物ばかりで、癒された時間だった。

この4日目は様々なことを学んだり体験したりした日だったので、これからの学園生活などで生かそうと思った。

●5日目

1組　岡崎　萌香

あっという間に訪れた最終日は、早朝の雲海を見に行くことから始まった。ずっと楽しみにしていただけあって、皆眠い目をこすりながらもゴンドラ待ちの行列に並んだ。天気も良かったので期待していたけれど、残念ながら雲海を見ることはできなかった。しかし、眠気や寒さと闘いながらも、ゴンドラの中で友達

と過ごした時間はとても楽しく、良い思い出になった。

朝食を終え次に向かったのは、「二風谷アイヌ文化博物館」だった。初めに、アットゥシ織という反物の技術伝承者である、藤谷るみ子さんの講話を聞いた。まず驚いたのは、「チセ」というアイヌの伝統的な建物だ。茅葺でできているそうなのだが、冷房などがないにもかかわらずとても涼しいことに驚いた。藤谷さんのお話からも、アイヌの人々は自分たちで知恵を出し合って考え、作って、生活を豊かにしていたのだと知ることができた。またそういった文化を伝えていく文字がアイヌ文化にはないことも知り、言葉だけで現在まで受け継がれているのはとてもすごいことだと感じた。「イランカラプテ」などのアイヌ語は、初めて耳にした独特な響きだったが、とても心地よく、印象に残った。そして博物館では、織物や道具などを実際に見て回った。「モレウ」といった渦のようなアイヌ文様や「イタ」といったお盆など、本当に多くの物が展示されていた。一つひとつにアイヌの人々の生活背景や、そのための知恵や工夫が感じられ、改めて感銘を受けた。とても興味深い文化だったので、機会があれば詳しく知りたいと思う。

最後に向かったのは、「ノーザンホースパーク」だ。道中でも、鹿や牛の群れを発見し、北海道感を存分に味わうことができた。到着してからは、焼き肉バイキングで美味しく楽しい昼食時間を過ごし、心も身体も満たされた。その後は、自然に囲まれながら男女混合でバスケを楽しみ、とても有意義で思い出に残る時間となった。

長いようであっという間だった北海道修学旅行。全力で楽しみ、時には真剣に学び、様々な体験ができた。ホテルや移動時間などの何気ない時間も、笑いが絶えずとても楽しかった。私にとって、かけがえのない思い出になった。

1組　妹尾　知美

星のリゾートトマムホテルの目玉とも言える雲海を見に、同室の学友ほぼ皆が早朝より出掛けた数時間後、好んで行かなかった私含む2名はいつも通りの時間に起床した。荷造りと部屋の片づけをあらかた済ませ、手持ち無沙汰になった時、今日が北海道修学旅行最終日であることをふと実感した。いつの間にか過ぎたこの数日間を回想しながら、雲海を見に行った学友らの帰りを待った。……後から聞いた話によると残念ながら雲海は見られなかったようで、リフト代千五百円を払って北の大地の暁光を浴びるにとどまったらしい。雲海と呼ぶには憚られる、ごくうっすら掛かった靄は視界を阻まず、大自然たる深山のただ中という絶好のロケーションが活き、見晴らしは素晴らしかったようである。

その後訪れた二風谷アイヌ文化博物館では、アイヌ文化伝承者の民謡を聞き、固有の服飾を見るなどして異文化理解に努めた。特有の発音や世界観が興味深かった。文字を持たぬ文化であったのが惜しまれる。アイヌ文化をモチーフにした著名なマンガが全巻揃っており、楽しんでいる人もいた。

全日程最後となったノーザンホースパークでは乗馬や馬車体験など動物との触れ合いができた。しかし私はアトラクションのアーチェリーの腕を友人と競ってばかりで、結局、肝心の動物の方は園内を五分散策して終わった。2人とも殆ど的に当たらなかった訳だが、「弓道っていいね」などと本気で語り合うほどに楽しかった。

改めて追想してもいい旅行であったと思う。北海道は風が気持ちよく乾いて爽やかだった。

高2修学旅行　オーストラリアコース

自分自身を見つめなおした修学旅行

3組　田中　志朋

6日間のオーストラリア修学旅行では多くのことを学びました。

まず、ファームステイです。そもそも他国でファームステイをするということがすごい経験だと思います。オーストラリアは水が貴重だと聞いていたので、とても大切に使いました。普段私たちが普通に使っている水のありがたみに気づかされました。

ファームステイ先では英語しか使うことができないので、できる限り英語で話すように努力しました。けれど、伝わらない部分も多くあって悔しかったです。知っている単語を話しても、発音やアクセントなどの違いから伝わらない時もあって、やはり単語を知っているだけではだめだと思いました。今後の英語の授業では気を付けて意識しようと思います。

次に、自然の美しさです。日本とは見るものすべてが異なっていました。日本とは比べ物にならない壮大な景色や自然、日本にはいない動物や植物など、そこには私の知らない世界が広がっていました。

そして、一緒に過ごすことによって分かった友達の大切さや、離れて過ごすことによって分かった家族のありがたさを感じることができました。

私はこの修学旅行を経て、自分の感覚や物事の考え方、人への接し方、将来像など改めて見直す良い機会となったと感じました。

自然沢山オーストラリア

3組　杉本　彩代

映画のワンシーンのようでした。どこまでも続く緑の絨毯、吸い込まれてしまいそうなほど深い青い天井。目を閉じれば景色、風、匂い、開放感、すべてを覚えていて、私をあの場所に戻してくれます。

この修学旅行での一番の思い出はファームステイです。ホストファミリーはとても優しくて、自分たちの子どものようにかわいがってくれ、今後経験できないようなことをたくさんさせてくれました。ニワトリやヤギのえさをあげたり、牛を間近で見たり、野生のワラビーやポッサムを見たり、数えきれないほど多くのことを経験しました。

特に印象に残っているものが2つあります。1つ目は広大な私有地の湖へ行ったことです。湖には一面に白い花が咲いていて、黒鳥やペリカンなどの鳥がいました。ホストファミリーのお気に入りの場所らしく、連れて行ってもらえたことがとても嬉しかったです。2つ目は犬の散歩です。家の近くの牧場を使って散歩させました。私たちは荷台に乗っていて、アトラクションみたいで楽しかったです。その時に見上げた空が今まで見たことがないくらい広く、時が止まったような感覚になったのを覚えています。

私は今回の修学旅行で大切なことをいくつも学びました。とにかく笑顔と感謝を忘れないことです。私はこの2つは当たり前のことだと思っていましたが、感謝は自分から伝えようとしないと決して伝わらないこと、言葉に出して笑顔で伝えるからこそ意味があるのだと学びました。修学旅行では、感謝しなければならない相手がたくさんいます。ホストファミリー、現地でお世話になった方、JTBの方、先生方など、たくさんいますが、一番感謝しなければならないのは両親です。笑顔で送り出してくれ、帰りが遅かったにもかかわらず、笑顔で迎えてくれました。最高の思い出が作れたのも、両親のおかげだと思います。

修学旅行ではたくさん経験し、たくさん学びました。大自然の中でこのように成長でき、本当に良かったです。オーストラリアにまた行きたいです。

HAPPY　HAPPY

5組　田中　健太

私がこの旅で一番楽しく思ったのは、ジョーンズさん宅でのファームステイでした。バスでアサートン高原に到着したとき、これから色々なことを体験できる

んだという期待と、果たして自分の英語は相手に伝わるのだろうかという不安で満たされていました。会場でのあいさつが終わり、ホストマザーと対面し車に乗ったとき、その不安はすべて消えました。なぜなら、車の中でマザーのサンディ・ジョーンズさんが、たくさん私たちに話しかけてくれたからです。それらの会話の大半を聞き取れたので、安心できました。

家に着いて娘さんとトランプをしたりして時間をつぶし、いよいよ食事の時間が来ました。サンディさんの手料理は班員ですべて食べきってしまうほどのおいしさでした。デザートのケーキも、これまで食べたことのないほどのおいしさでした。サンディさんは料理が大好きらしく、とてもおいしい料理を振る舞ってくれました。

翌日からは、朝ご飯を食べたらお出掛けに連れて行ってくれ、家にランチを食べに戻り、ランチ後には更にお出掛けに連れて行ってくれるといった、とても充実した生活ができました。お出掛け先で一番印象に残っているのは、ミラアミラアの滝です。小さな町にある大きな滝で、有名な観光地になっており、オーストラリアの壮大な自然を感じることができ、貴重な体験になったと思います。

そしてもう1つファームステイで印象に残ったのは、サンディさんが何かご飯を食べるたびに、「ハッピーハッピー?」と聞いてくれたことです。とても幸せな気持ちになるので「ハッピーハッピー!」と返しますが、1つの単語を使ったフレーズなのに、こんなに幸せな気持ちを表すことができるのかといった、カルチャーショックに似たようなものを感じました。

自分の英語が通じることや貴重な体験ができ、ハッピーハッピーなステイでした。

高2修学旅行　シンガポール・マレーシア

●1日目

5組　塩谷　明美

6月10日、私たちシンガポール・マレーシアコース男子22名、女子19名の計41名は朝5時に学校、また一部は6時50分に広島空港に集合した。早朝ということもあり、皆眠たそうだったがそれ以上にこれから始まる旅に胸を躍らせていた。羽田国際空港を経由してチャンギ国際空港に到着した。少し肌寒かった東京とは打って変わって、シンガポールはとても湿度が高く肌にまとわりつくような暑さだった。

バスのガイドさんは現地の方で、日本語がとても堪能で驚いた。日本では見られない植物やシンガポールの歴史などを肌で感じることが出来た。初めてのアジア旅行ということもあり、アジア独特の文化や街の雰囲気、さらに多民族国家特有の様々な地方の文化が混在した今まで見たこともないような風景を見ることが出来、とても楽しかった。

初日のメインはマーライオン像の見学だった。今までテレビなどを通してのみ見たことのあるマーライオン像を実際に自分の目で見ると、実物は大きくとても迫力があり感動した。初日から充実した旅行だったのだが、食事はあまり口に合わず、明日以降の食事に対して不安を抱くとともに今から日本食が恋しい。

明日からの予定もとても楽しみで、期待で胸がいっぱいである。

●2日目

1組　山木　彩未

この日は朝6時30分ごろに起床して、ホテルでのビュッフェスタイルの朝食をとり、まず、マリーナベイサンズというホテルのスカイーパークに行った。最上階のテラスに行くとシンガポールの都会的な町並みを全て見渡せた。

その後、国境を越えてマレーシアのシーフードレストランで昼食を取った。マレーシアの料理は少し辛かったけれどとてもおいしかった。マレーシアの町並みはシンガポールとは全然違っていて、インド人街や、ヒンズー教の寺院があり、多民族国家というものを目の当たりにした。マレー文化村では、花の絵を赤、青、

緑、黄などにそれぞれが自由に染める体験をしたり、マレー民族の伝統的舞踊を鑑賞して楽しんだ。

午後4時ごろにシナラン村へ到着した。村長自ら歓迎式を催してくださり、そこから私たちは各ホストファミリーの家へと向かった。私のホストファミリーは7人家族でとてもにぎやかなところだった。夕食はナイフやフォークを用いず右手を使って食べるなど日本とは文化が全く違いとても新鮮だった。お風呂も冷水のシャワーでとても寒く感じたが、ヒーターを使う文化が向こうでは無いようだった。その後私たちは民族衣装を着て写真を撮ったり、ビー玉を使ったマレーシア独特の遊びを教えてもらい、お菓子を食べながら楽しく遊んだりした。たくさん出していただいたお菓子の中ではバナナチップスが一番おいしかった。ホストファミリーと英語で積極的にコミュニケーションをとることができとても勉強になった。

●3日目

6組　藤井　隆弘

3日目の朝は、マレーシアのホームステイ先の家で迎えた。カレーと、ナンに似たロティ・チャナイの朝食をいただいた後、お別れ式でお世話になったそれぞれのホストファミリーにお礼の言葉を言い、シンガポールに戻った。このとき僕はマレーシアの文化を学ぶ貴重な経験ができて本当によかったと感じた。

シンガポールのホテルでB&S（ブラザーアンドシスター）プログラムでお世話になる現地の学生の方たちと合流した。そして一緒に電車とバスを乗りつぎ、シンガポールの都市を回った。僕の班は、オーチャードロードとアラブ・ストリートで買い物をした。たくさんのお店が並んでいて、どこへ行こうかと迷ってしまうほどだった。楽しみにしていた昼食は、フードコートでそれぞれ自分が好きなものを食べた。僕はそのとき初めてシンガポールのチキンライスを食べた。チキンをご飯にのせ、ソースをかけて食べるのがとても美味しかった。その後も少し買い物をして、夕食の時間の時に現地学生にお礼を言い、お別れをした。この日はシンガポールの綺麗な街並みを歩き、日本とは異なる食べ物を知ることができた、とても意義のある充実した一日であった。日本にはない新しい発見や体験をたくさんすることができたことで、シンガポールをもっと知りたいと思った。

●4日目

6組　和田　雄喜

この日は、まずセントーサ島に行った。島のマーライオン像は、初日に見たマーライオンより大きく、てっぺんにアンテナが付いていたのでどこか不思議な気持ちになった。

そこから班別に解散して、僕らの班は最初に水族館に行った。そこではつい、水族館や動物園などに行くと動かなくなるいつもの癖がでてしまい、他の班員にはかなり迷惑をかけてしまった。しかし水族館には、多くの種類の生き物がいてどれも魅力的なものばかりだった。

その後入場したユニバーサルスタジオでは、これまで苦手だったジェットコースターに勇気を出して乗った。初めは正直なところ怖かったが、実際に乗ってみると体が浮くような感じがしてとても楽しかった。そのままの勢いで、360度回転する乗り物にも乗った。いきなりで慣れていなかったので最初のうちは声も出なかったが、途中からは楽しくて仕方がなかった。さらに時間が余ったのでUSS内の2周目を回った。

夜には、シンガポール動物園のナイトサファリツアーに参加した。ツアー自体は30分ほどだったが、普段の動物園ではありえないほど近くで、しかも檻なしの状態で動物たちを見ることが出来た。また近くで見た動物たちはとても迫力があり、感動の連続だった。

●5日目

4組　佐能　成海

動物園から直接チャンギ国際空港に向かい、深夜の空港で2時間過ごした。日本の時間で2時近くだったので、とても眠たかった。そして、シンガポール時間の午前1時50分頃ついにチャンギ国際空港を離陸した。疲れていたのであっという間に寝てしまった。

気が付くともう羽田空港に着いていた。飛行機を降りた瞬間、日本に帰ってきたんだなと実感した。羽田空港で国内線に乗り換える際に乗ったバスから見た景色は、シンガポールとは違って見慣れたものだったので安心感があった。空港での自由時間の間に、日本に帰ったらまず食べたいとずっと思っていたラーメンを食べた。シンガポールで食べた料理もおいしかったが、やっぱり日本食が一番だなとしみじみ思った。いつでも食べられていたものが、海外に行くことにより食べられなくなったので、改めて日本食のありがたさを実感した。

今回の修学旅行で、食文化や生活の違い、また言語の違いがあっても、シンガポールやマレーシアで出会った人たちは、やさしく接してくれたのでとてもありがたかった。自分が英語でうまくしゃべれなかった時も焦らさず、ゆっくりと待って聞いてくれたので、英語が苦手な自分も随分助けられた。たとえ英語が苦手でも、外国人と仲良くなることができて、この短い期間でたくさんの貴重な体験をすることができた。この修学旅行での貴重な体験を将来に生かした行きたい。

生徒入賞作品

▼第65回青少年読書感想文岡山県コンクール課題読書　佳作

「あなたとわたしに流れている～『この川のむこうに君がいる』を読んで」

高1　進藤　春菜

『この川のむこうに君がいる』がこの作品の題名である。「この川」、そして「君」とは一体なんだろうか。

震災で兄を亡くし、自分を知る者のいない高校に入学した梨乃。中学から憧れていた吹奏楽部に入部する。ある日「荒川」という川の岸でアルトサックスを練習する。すると同じく震災経験者であり、吹奏楽部に所属する遼の住む向こう側からかすかに金管楽器の音が聞こえてきた。

「この川」とは「荒川」のことであり、「君」とは「遼」のことなのだろうか。もちろんそれも一つの解釈としてあるだろうが、私は違う意見を持つ。

「津波で家がだめになってしまったんでしょ？　クラスで話し合って決めたんだよ。みんなで、岩井さん（梨乃）のこと、応援しようって」

梨乃が新しい中学に入学して早々クラスメイトの紅実はそう言った。きっと梨乃を想っての発言だった。でもその時から梨乃は「かわいそうな被災者」になってしまった。

良かれと思ってしたことが実は相手を苦しめている。その典型的なパターンだ。きっと紅実は梨乃との間に「澄んで、穏やかに流れるキラキラした川」を流している。でもその川は梨乃にとって「淀み、川なのに終わりのないドロドロした川」なのだろう。

梨乃と梨乃の母はどうだろうか。

――兄が生きているなら、わたしはだめだめの末っ子だってよかった……。――

兄の死を引きずる母。そして梨乃以上に引きずる母。どうして兄は死なければならなかったのか。どうして私じゃなかったのか。どうして私が生きてしまったのか。兄の死は誰のせいでもない。そんなことは、梨乃も梨乃の母も本当は分かっているのだろう。それでも何かにこじつけないと心が持たないのかもしれない。母が梨乃でなく兄のことばかりなこと。希望や欲望が全部梨乃にのしかかってしまったこと。苦しくて、苦しくて、でももうどうすることもできない。そんな梨乃を見ている私が苦しかった。私はまだ17歳でまだまだ大人ではないが最近気づいたことがある。弱みのない完璧な人はいないということだ。大人といっても結局は子どもの延長線だ。私はまだわが子を失う悲しみは分からないが、きっと計り知れないだろう。梨乃の母が息子を失ったのも然りだ。娘である梨乃に心無い言葉をかけてはいけないことは分かっている。そういう言葉を梨乃にかけたところで息子が戻ってこないことはもっと分かっている。その事実が梨乃の母を加速させているのだと思う。

かつて梨乃と梨乃の母にはお互いに同じ「川」が流れていたのではないだろうか。こっちの岸には梨乃が、あっちの岸には梨乃の母が。一緒に見ていたやわらかく、優しい風景は震災後から徐々に変わっていく。梨乃の母が流す「川」には色がなく、梨乃が流す「川」には〝あっちの岸〟にいた母がいつの間にかいなくなっている。「川」の風景がお互い変わってしまってから、二人の関係は親子という肩書きを除いて、ヒビの入ったガラスのように脆弱なものになってしまったのだろう。

そんな梨乃に同じ「川」で、同じ「風景」を見せてくれたのは遼だった。

「それさ、岩井さんが背負わなくて、いいんじゃないの？」

兄の死を初めて自分から言った梨乃に、兄の死に責任を感じていた梨乃に、遼はそう言った。私が一番心に残った一言だ。梨乃はこの言葉にどれほど救われただろうか。遼が梨乃と流した「川」の形は分からない。でもきっと力強く流れている。私はそう感じた。相手としっかり向き合い、内面を見つめ、分かろうとする努力をして初めて「川」は一体となるのだ。遼は梨乃に、そして私たち読者にそのことを教えてくれた。

冒頭で触れた「川」とは向き合う全ての人への心情を具現化したもので、「君」とは向き合う人をさすと私は解釈する。

ここからは完全に私の想像だが、川は海へ流れつく。反対に海は川からできている。私の解釈した「川」で例えてみる。二人が違う「川」を見ているとやはり違う「海」ができる。同じ「川」でも淀んでいると、淀んだ「海」になってしまう。そうなってしまったとしても二人が努力し、満足のいく「川」を流せたなら「海」は少しづつきれいになる。「海」は二人の将来を描いている。もし今、お互いにうまくいかず違う「川」や淀む「川」が流れていても諦める必要はどこにもない。むしろ〝今〟が大切なのだ。後で同じことを繰り返さぬように、しっかり観て向き合うべきだ。そんなメッセージを作者から受け取ったような気がした。いつか私も「川」を、「海」を分かち合える人と出会えるだろうか。

▼第65回青少年読書感想文岡山県コンクール自由読書　佳作

地獄変に見る藪の中～『藪の中』を読んで」

高1　佐藤　弘汰

「吝嗇で、慳貪で、恥知らずで、怠けもので、強欲で――いやその中でも取分け甚しいのは、横柄で、高慢で、いつも本朝第一の絵師と申す事を、鼻の先へぶら下げている事でございましょう」

これがこの話の主人公である良秀の性格だ。この性格が事件を起こした要因の一つに違いない。

話のあらすじは、大殿様が地獄変の屏風を良秀に描くようにいいつけたが、見たものでなければ描けないと言う良秀には、ただ一つ描けない所があった。それは牛車の中で焼け死んでいく美しい女の姿だった。良秀は大殿様にその光景を実際に見せてくれと懇願し、大殿様は了承した。良秀は屋敷から離れた山荘に呼び出され、殿様は笑いながら牛車の中の女を見せてやると言い簾を上げた。そこにいたのはなんと良秀が一番に可愛いがっていた彼の実の娘だった。良秀は娘を焼き殺されたが、その光景を元に絵を書きあげるのだった。

この作品を繰り返し読むことで気付いたことがあった。良秀は自分の娘を牛車中で焼かれることを知っていたのではな

いかということだ。良秀が悪夢でうなされながら、「奈落へ来い。奈落には――奈落には己の娘が待っている」と話す記述が大殿様に牛車を焼くように頼む場面の前にある。また、悪夢を見るようになった後からは弟子が時々独りで泣く良秀を見かけるようになった。強情な老爺であった良秀が泣くのは不自然だ。良秀が知っていたとすると、大殿様が牛車の件のお願いを了承した時、悲しさを感じて体を震わす場面も、娘の死に様を見た時、最後には美しい火焔の色とその中に苦しむ女人の姿に感動してしまう場面も納得がいく。そう読むと、親として娘を守りたい思いと、どうしても絵を完成させたい思いとが交錯し、苦しむ良秀の姿が見えてくる。苦しんだ末に絵を描きあげる方を取り、絵を描き世間からの評価を得たが、最終的には娘を追って自殺した。たとえ一度は娘を犠牲にする覚悟をした良秀であっても娘への思いを捨てることができなかったのだろう。私は、良秀を気の毒に思う気持ちと、娘を殺してまで完成させたい考えを理解できない気持ちがあった。作品をつくる方を取る、芸術家として自分の道を突き通す良秀の凄みを感じる気持ちもあった。そう思うまでに深く読めば読む程考えを変えられる作品で難しかった。物語なのにおどろおどろしく、作り話なのに気持ち悪さがあり、地獄変の屏風が魅力的に見えた。芥川龍之介の文章の凄さを感じた。

私が芥川龍之介の作品を読んだのは二度目だった。初めて彼の作品に触れたのは学校の授業でのことだった。その時の授業で芥川のテーマはエゴイズムだったと習った。エゴイズムという目線で見ると、この作品にも様々なエゴが描かれていた。良秀の娘が言う通りにならないことの腹いせで彼女を殺してしまった大殿様のエゴ。絵を完成させるためなら娘さえも殺してしまっても良いと考える良秀のエゴ。どちらも自分の欲望のままに動き、自分の都合しか考えていない。他にも多くのエゴが書かれていた。自分勝手に考えを変え押し付ける、生々しく人間らしい。現実でもよくあることだ。自国の利益のために、助け合いを忘れ他国を落としいれる。自分の意見を通したいがために無理に議論を進める。テロリズム、虐殺なども歴史の中で繰り返された。もっと大きな目で見れば、地球温暖化や森林の破壊、動物の乱獲も人間のエゴだ。「地獄変」の人々は一つの事に夢中になり過ぎて何の罪もない娘の命をも奪った。これと同じように現実の世界でも、快適さ、利益を求め、欲望のままにエゴを突き通している。欲望とだれかの不幸を天秤にかけた時、欲望を取ってしまう人間のエゴ、それはだれしもが持っているものだろう。私自身の身勝手の後ろで誰かが傷ついているかもしれないと思うと怖くもなった。私が良秀程の才能を持つ人間だったならば、人を殺すまでとは言わないが何かを犠牲にして欲望のままに動く気持ちも分かる気がする。エゴを突き通すからこそ生み出される魅力もあるのだろう。今の自分にはエゴを突き通してまでやり遂げたいと思わせるものはない。もし、自分にやり遂げたい何かが出来た時、その目標を達成するためには多少の犠牲は必要だと思う。しかし、他人を陥れ、人

生までをも奪ってしまうことはもちろん間違いだ。だから、目標だけを見続けるのではなく、俯瞰した視野を持つことで自分の本来の善悪の価値観を見失わないようにしていきたい。

▼第17回　永瀬清子賞

優秀賞　中2　田中　希莉子
佳　作　中1　岡野　泰士
　　中2　池田　ありす
奨励賞　中2　佐藤　祐人

優秀賞　黄金色に輝く

中2　田中　希莉子

十一月　稲刈りの終わったころ
休耕田を耕し　うねを作って
小さい種をパラパラまいた
数日たって　雨が降って
十日過ぎると細い芽が出てきた
細長い葉っぱはぐんぐん伸びた
だんだん寒くなってきて
細く長く冬を迎えた

二月　霜がおりるころ
長靴はいてカニのように横歩き
せっかく生えているのにうねの上から横歩き
ふんだら倒れてくたっとなった
ごめんよ　ごめん
でも次の日は　また元気に立っていた
昨日ふむ前よりも元気に見えた

五月　私の背に届きそう
実った穂はきれいな緑色
風にさわさわふかれながら
頭を重そうにゆらしてる

近くの田んぼで田植えが始まるころ
黄金色に変わってた
できた　できた
麦ができた

麦でストローを作って
夏にはおいしい麦茶で乾杯だ
茎を切って編んだらぼっかん真田
麦わら帽子も作れるよ

麦ってすごいね
私も麦のように　くじけても立ち上がろう
そして誰かの役に立とう
麦のように黄金色に輝きたいな

私が生まれるずっと前　麦の産地だった
笠岡
秋にはまた麦をまこう
黄金色に輝く麦にまた会いたい

入賞おめでとう

▼2019年度明るい選挙啓発ポスターコンクール

会長賞　中3　小出　佳奈
入　選　中1　仁科　裕紀子
　　中2　西野　一奈

▶第24回岡山県高校生英語エッセイコンテスト　優秀賞

高２　岡﨑　拓翔

Stop Giving Children Bizarre Names.

Konko Gakuen High School

OKAZAKI Takuto

What do you think about giving children bizarre names? The number of children who have names most people can't read correctly seem to be increasing recently. There are also some names that are from anime characters. I believe that their parents want to make their children stand out by making their names unique.

Last summer, I did some volunteer work and taught children in my neighborhood how to draw pictures. In order to be friendly, I tried to memorize their names and call them by their first name. When I looked at a girl's name tag, I was at a loss. I didn't know how to pronounce her name properly. A 16-year-old high school student cannot even read the name of a school child? I called her by the name which I thought it should be. She seemed to be sad. I found I was wrong. I felt down because I hurt her feelings.

A couple of days later, I found an article titled “Bizarre Names are Becoming a Social Problem”. Some children have the names that are pronounced Kitty and Pikachu. It is true the names sound familiar, but who can read “姫茶” or “光宙” in the right way? These children could be bullied because of the peculiarity of their name.

In my opinion, giving children clearly bizarre names is wrong. If parents were wise, this social problem wouldn’t occur. I learned that after they have become fifteen years of age, they can file for a change of their name into a new one by themselves. In other words, they can be troubled by the name chosen by their parents for as many as fifteen years. This time is especially important for children because this is when children build their personality.

Even if they manage to change their name at the age of fifteen, things will not be easy. Changing their name is like losing the identity that they have formed. Parents may just want to make their children stand out, but is it really necessary? Ichiro Suzuki, one of the most famous professional baseball players, has quite a common name. What has appealed to the world was his nice personality, and his great accomplishments, but not his name. What matters is what he is or what he does, not how unique his name is.

Once they put a name on their children, it is hard to change it, but they might continue to be made fun of by many people. I think all parents should stop to think over the future of their beloved children and be aware of their responsibility when naming them. Adults must not name their children thoughtlessly. We can solve this problem just by paying close attention. “Stop giving children bizarre names”. I hope this problem will disappear soon.

▶第14回岡山県高校生英語レターコンテスト　入選

高１　山口　祐紀

Konko Gakuen High School

YAMAGUCHI Yuki

Dear 10 year-old me,

I found a letter from you to the future me when I was cleaning my room. I’ll write the reply from now. You are suffering from an illness now. It has been transmitted from your letter that the long hospital life is painful.

I read the statement “Was I able to leave the hospital?” and I wanted you to enjoy the joy when you were discharged from the hospital. Now, that hospital life seems like a lie. There are things I can’t do but I can play the piano, I can study at school, I can eat my favorite food and I’m happy every day.

The word I want to say to you is “Thank you.” Thank you for your hard work. Now I live thanks to you. For example, the happy of being able to have a meal with everyone, the warmth of the sun and the comfort of the wind, and the joy of being able to walk with your friends on school routes.

“What kind of work are you doing?” I can’t answer it now, but I want to be a doctor who saves children suffering from diseases like you were. I want to make many children smile as a doctor. I’ll write a letter to you again when I become such a doctor.

You can do anything as long as you have a life, so try anything. First of all, please do your best for the future and receive treatment. A fun time every day will definitely come. I hope you will get well soon.

Sincerely,

15 year-old you

生徒会活動

《高校生徒会》

体育会　9月11日（水）に開催された。気温が非常に高く、昼休み時には雨が降り、閉会式時には雷が鳴り始めるような天気であったが、無事にすべてのプログラムを実施することができた。様々な競技で熱戦が繰り広げられ、青ブロック（2年1・2・6組）が優勝、赤ブロック（3年1・4・5・6組）が第2位、橙ブロック（3年2・3・7組）が第3位となった。

秋季球技大会　予定されていた10月18日（金）の天候不順が予想されたため、延期して10月21日（木）に1年生・2年生で実施した。肌寒い気候であったが、ソフトボール、フットサル、ドッヂボール、ティーボールの4種目が行われ、1年生は1組が優勝し、2年生は1組と3組が同率で優勝した。

《天文部》　7月、「星団の色等級図」をテーマに、美星天文台で研修合宿を実施した。また、中学生を中心に天文博物館のパラパラパンフレットの英語化に取り組んだ。

8月、浅口市中央公民館で行われた、小学生対象の科学工作夏ＧＡＫＵサプリに、ボランティアスタッフとして参加した。また、国立天文台の見学ツアーに参加し、ツアーガイドの仕方についても学んだ。このとき、英語化したパラパラパンフレットを天文博物館に提出した。

9月、ほつま祭では、例年のように、展示・プラネタリウム・天文台公開を実施した。今年は「宇宙の歴史」をテーマに展示を行った。

11月の夜間観測では、月・星雲・星団の観測・撮影を行った。

《書道部》　第37回ふれあい書道展筆都大賞：中3山田紋歌・第54回高野山競書大会（推薦：高2大野未貴・特薦：中3遠藤万結香・準特薦：中3山田紋歌・金賞：高2草加真希・高1進藤春菜・中3石井雄人・中2寺川なのは）第87回全国書画展覧会（金賞：中3遠藤万結香・中3山田紋歌・中2寺川なのは・中1大塚萌衣）

《茶道部》　ほつま祭では「令和」をテーマにお茶会を行った。生徒は緊張しながらも、日ごろの練習の成果を発揮した。11月4日（月）には土佐家旅館で行われた秋の芸能祭に参加した。ステージでお点前についての説明をしたり、会場の一角でお点前やお運びをしたりと日頃とは違う雰囲気の中で様々な年代の方と交流できた。また、海外からの留学生やＪＩＣＡの研修員が来校され茶道体験をした際には、身振り手振りでお抹茶の立て方を説明したり、お点前を披露したりと、とてもよい交流ができた。

《生物部》　蒜山で夏の合宿を行った。現地では、オオサンショウウオの調査に参加させていただいた。夜の川を1時間ほど遡上し、3匹のオオサンショウウオを捕獲。体長や体重を測定した。マイクロチップで、個体を識別する方法や、マイクロチップを注入する作業も見学させていただいた。その他にも、多くの水生生物を観察することができ、合宿の様子はほつま祭でも発表した。

《音楽部コーラス》　11月末現在、中1が15人になり久しぶりに活況を呈している。中2、高1にも新入部員が入り、初参加のコンクールに向けて新たな体制で頑張ることができた。

4月14日（日）たんぽぽまつり《金光公民館》曲目　パプリカ　ほらね、

6月8日（土）岡山県高等学校合唱祭《高梁総合文化会館》曲目（単独）我と来て遊べや親のない雀　パプリカ（合同）僕が僕を見ている　大地讃頌

6月16日（日）岡山合唱フェスティバル《岡山シンフォニーホール》曲目　ＨＯＷＥＶＥＲ

7月20日（土）福永・宮東地区夏祭り《ちびっこ広場》夏祭りの冒頭にパプリカなど親しみやすい曲をお届けし、地域の方々と触れ合うことができた。

8月2日（金）訪問演奏《敬心かもがた保育園》アニメソングなど子供たちのよく知っている曲を中心に歌い、部員たちが考えた劇も披露した。演奏後、短時間ではあるが園児たちと触れ合い遊びができてとても良い経験となった。

8月5日（月）～6日（火）夏合宿

8月12日（月）岡山県合唱コンクール《倉敷市芸文館》銀賞（中国大会推薦）曲目　Ave Maria　我と来て遊べや親のない雀

9月8日(日)ほつま祭《ほつま体育館》曲目　Pop star　夢　負けないで　他

9月21日（日）中国合唱コンクール《ふくやまリーデンローズ》銅賞　曲目　Ave Maria　我と来て遊べや親のない雀

9月29日（日）チャリティーコンサート《総社市民会館》曲目（合同のみ）僕が僕を見ている

11月10日（日）金光町音楽祭《金光公民館》曲目　津軽海峡・冬景色　Gloria JOY！

《文芸部》　細々とではあるが、2名の部員が新聞への投書、小説の執筆等を行った。

《高放送部》　ほつま祭や体育会などの学校行事では司会進行を務めた。11月17日（日）に行われた第43回岡山県高等学校総合文化祭放送文化部門発表会　兼　第43回岡山県高等学校秋季放送コンテストのアナウンス部門に1年6組原田珠希、2年5組土肥幸実が、朗読部門に1年6組岡邊こむぎ、2年6組阿部七菜子が出場した。

《中美術部》　ほつま祭は【Paper Art】をテーマに「切り絵」に挑戦した。夏休み前から3ヶ月かけ、みんなで協力し、完成させた。

12月3日～8日、天神山文化プラザで行われた第24回岡山県生徒作品・表現活動発表会に出展した。

12月15日、金光公民館で行われた金光キッズフェスティバルに出展した。

《高美術部》　ほつま祭では「Art collection 2019」と題し、部員たちがこれまでに制作した数々の作品を展示した。また、来年2月に行われる岡山県高校美術展に向けて、個人作品の制作に励んだ。

《軽音楽部》　ほつま祭で5バンドが6曲演奏を行い、練習した成果を存分に発揮した。

《陸上競技部》

☆全国大会

○インターハイが沖縄県で開催され、土屋健太郎がやり投げで3位。仁平優宙が走幅跳に出場した。

○国民体育大会が茨城県で開催され土屋健太郎がやり投げで7位に入賞した。

☆中国大会

○中国高等学校新人大会が岡山県で開催され、谷本きなりが100ｍ、清水麻理が５０００ｍ競歩に出場した。

☆県大会

○岡山県高等学校陸上競技選手権大会が開催され、土屋健太郎がやり投げで優

勝。安福柊汰が110mハードルで優勝、200mで6位。谷本きなりが100mで4位、200mで6位。清水麻理が5000m競歩で5位に入賞した。

○岡山県高等学校新人陸上大会が開催され、安福柊汰が110mハードルで優勝。谷本きなりが100mで4位、200mで6位。清水麻理が5000m競歩で4位。西森翔眞が三段跳で5位。荒川歩夢が走幅跳で8位に入賞した。

○岡山県陸上競技カーニバルが開催され、清水麻理が5000m競歩で6位に入賞した。

○岡山県中学校秋季陸上競技記録会が開催され、六原未智が走幅跳で優勝、100m4位。小寺雄晴が走幅跳で4位。高橋咲太が100mで8位に入賞した。

○岡山県中学校秋季陸上競技大会が開催され、小寺雄晴が走幅跳で6位に入賞した。

《中野球部》 7月6、7日に井原球場などで行われた備南西地区夏季総体は、1回戦美星中学校に22—0で勝利したが、代表決定戦で金浦中学校に0—1でサヨナラ負けを喫し、7年ぶりに県大会出場を逃した。

8月2日に総社球場で行われた総社市長杯は、1回戦で総社中学校に0—8で敗れた。

新チームとなり、10月19、20日に井原球場などで行われた備南西地区秋季大会では、2回戦木之子中学校に6—0で勝利し、3回戦笠岡東中学校に3—0で勝利し、代表決定戦では新吉中学校に7—0で勝利し、8年連続の県大会出場を決めた。

11月2・3日に笠岡市営野球場などで行われた岡山県秋季大会では、1回戦多津美中学校に1—0で勝利したが、2回戦高松中学校に3—4で敗れ、ベスト8となった。

11月16・17日に玉島の森野球場で開催された第20回玉浅良寛杯中学校野球大会では、2回戦金光中学校に1—3で敗れた。

《高野球部》 7月13日より開幕した全国高等学校野球選手権岡山大会では、一回戦は岡山朝日高校に12対1で勝利し、二回戦は備前緑陽高校に9対0で勝利し、三回戦は関西高校に2対0で勝利し、準々決勝は東岡山工業に5対3で勝利したが、準決勝で岡山学芸館高校に1対8で敗れた。8年ぶり五度目のベスト4進出であった。

新チームになり、8月末から秋季岡山県高等学校野球大会西部地区予選が始まり、初戦で倉敷青陵高校に7対8で敗れたが、興譲館高校に4対2で勝利し、倉敷高校にも7対0で勝利し、三校が2勝1敗で並んだため順位決定戦に回った。代表決定進出戦では倉敷青陵高校に9対1で勝利し、代表決定戦で興譲館高校に8対6で勝利し県大会出場を決めた。県大会出場に関する順位決定戦では高梁日新高校に2対1で勝利し、一位校として出場を決めた。続く県大会では、一回戦は、高梁日新高校に2対0で勝利し、準々決勝では、岡山東商業高校に4対1で勝利したが、準決勝で、倉敷商業高校に1対5で敗れた。さらに中国大会出場を懸けて三位決定戦でおかやま山陽高校と対戦したが、3対4で敗れ、四位という結果に終わった。

11月には岡山県高等学校野球一年生大会が行われ、2回戦で岡山理科大学附属高校に1対10で敗れた。夏秋連続でベスト4進出と、成果の出た一年であった。

《ラグビー部》 7月21日（日）に高体連夏季強化練習会に参加した。合同チームであるが、新チームとして初めての試合を経験した。9月14日（土）に岡山県高等学校ラグビー選手権大会に岡山朝日・岡山城東・岡山一宮・倉敷との合同チームで参加した。1回戦で倉敷工業に14—79で敗れた。11月2日（土）に全国高等学校ラグビーフットボール大会岡山県予選会に岡山朝日・岡山城東・岡山一宮・倉敷との合同チームで参加した。1回戦で倉敷工業に0—71で敗れた。

《中男子ソフトテニス部》 7月6・7日に笠岡総合公園テニスコートで行われた備南西地区総体では、個人戦に6ペアが出場し、矢島・内田ペアが初戦敗退、川田・礒部ペアが2回戦敗退、遠藤・中野ペア、下津・井上ペアが3回戦敗退、大石・藤井ペアが4回戦敗退（ベスト16）で、山名・小野ペアが準優勝で県大会の出場権を獲得。団体戦では予選リーグで小北中学校に3—0、矢掛中学校に3—0で勝利し、決勝トーナメントで大島中学校に1—2で敗退、3位決定戦では新吉中学校に0—2で敗退し、ベスト4ではあるが、県大会出場は果たせなかった。7月22日に岡山市浦安総合公園で行われた県総体では、個人戦で山名・小野ペアが出場し、初戦敗退であった。7月27日に笠岡総合スポーツ公園で行われたチャレンジカップでは、8ペアが出場し、I部で遠藤・中野ペア、下津・井上ペアが2回戦敗退、大石・藤井ペアが3回戦敗退（ベスト16）、山名・小野ペアがベスト8であった。II部で能宗、北口・内田ペアが初戦敗退、矢島・竹内ペア、篠原・桑田ペアが3回戦敗退であった。新チームになって9月16日に行われた矢掛町中学生招待ソフトテニス大会（シード決め大会）では、矢島・竹内ペア、桑田・内田ペアが初戦敗退、篠原・能宗ペアが3回戦敗退であった。10月19・20日に井原運動公園テニスコートで行われた備南西地区秋季総体では、個人戦に4ペアが出場し、内田、篠原・北口ペア、桑田・能宗ペアが初戦敗退、矢島・竹内ペアが2回戦敗退。団体戦では予選リーグで小北中学校に1—2、鴨方中学校に0—3で敗退した。11月16日に井原運動公園で行われたチャレンジカップでは、II部で全ペアが予選敗退という結果であった。

《中女子ソフトテニス部》 5月、第13回びんごふくやま中学生ソフトテニス交歓大会（団体）に出場、ベスト8となった。第32回井原市中学生招待ソフトテニス大会に、中3松田・藤原ペア、中3岡田・中2河田ペア、中2金田・河田ペアが出場した。

7月、備南西地区総合体育大会（ソフトテニス競技）個人戦では、松田・藤原ペアがベスト16、岡田・河田ペア、金田・中1古江ペア、中1安藤・谷野ペアが2回戦敗退、中1中村・原田ペア、中1伊藤・井上ペアが1回戦敗退で、県大会出場はならなかった。団体戦は、予選敗退に終わった。第29回福山市スポーツ少年団中学生ソフトテニス大会（個人）に出場した。第27回チャレンジカップ備南西地区中学生ソフトテニス大会（個人）では、I部で松田・岡田ペアが3回戦敗退、金田・河田ペアが2回戦敗退、II部で安藤・谷野ペアが3回戦敗退、中村・古江ペア、伊藤・原田ペアが2回戦敗退、OP・井上ペアが1回戦敗退であった。

8月、第7回天野カップ中学生ソフトテニス研修大会（団体）に出場した。第23回ワコースポーツ文化振興財団杯中学校ソフトテニス大会（個人）で、金田・河田ペア、安藤・谷野ペアがベスト16、

中村・原田ペア、伊藤・古江ペアが1回戦敗退であった。

10月、備南西地区秋季体育大会（ソフトテニス競技）個人戦では、金田・河田ペア、安藤・谷野ペアが3回戦敗退、中村・古江ペアが2回戦敗退、原田・伊藤ペアが1回戦敗退であった。団体戦は、予選敗退に終わった。

11月、第28回チャレンジカップ備南西地区中学生ソフトテニス大会（個人）では、Ⅰ部で金田・河田ペアが初戦敗退、Ⅱ部で中1安藤・谷野ペアがベスト8、中村・古江ペアがベスト16、原田・伊藤ペアが予選敗退であった。

新チームは部員8名だが、全員がレギュラーとして来年夏の総体での県大会出場を目標に、毎日練習に励んでいる。

《高女子ソフトテニス部》 8月17日・18日に福田公園テニスコートで行われた高梁川流域高校ソフトテニス大会《個人・団体》では、個人戦に1ペア出場したが1回戦敗退。団体戦はペアがそろわず棄権となった。9月21日に玉島の森テニスコートで行われた岡山県高校新人大会備西地区予選《個人》に2ペアが出場したが、2回戦までに敗退し県大会出場権の獲得はならなかった。11月2日に浦安総合公園テニスコートで行われた岡山県高校新人ソフトテニス大会《団体》には2ペアで参加し、1回戦で美作高に敗れた。

《中卓球部》 7月6～7日に備南西地区総体に出場した。男子団体では3位で県大会出場を決めた。男子個人では白神（L1）が5位，光田舜（L2）が12位で県大会出場を決めた。

7月23～24日に岡山県総体に出場した。男子団体では1回戦で玉島東に3―1で勝ち，2回戦で京山に1―3で敗れたがベスト16に入った。男子個人では光田舜と白神が出場したが1回戦で敗退した。

9月14日に備西支部シード決め大会に出場した。男子個人では白神が1位、光田隆（L2）が3位、光田舜が4位、山本（L2）が6位、藤井（L1）が13位に入り、シード権を獲得した。女子個人では大野（L2）が6位に入り、シード権を獲得した。

9月15日にSTTSオープン卓球大会に参加した。男子シングルスでは山本と白神がベスト8に入った。男子ダブルスでは光田隆・山本組と光田舜・白神組がベスト4、岸本（L1）・藤井組がベスト8に入った。

10月13日に井原卓球協会会長杯に参加した。男子団体で金光学園Aと金光学園Cが決勝リーグに進出した。

10月19～20日に備南西地区秋季大会に出場した。男子団体では1位で県大会出場を決めた。男子個人では白神が1位、光田隆が6位、光田舜が8位で県大会出場を決めた。女子個人では大野が7位で県大会出場を決めた。

11月2～3日に岡山県秋季大会に出場した。男子団体では予選リーグで久米に3―0、玉島東に3―2、竜操に3―1で勝ち、決勝トーナメント準々決勝で中道に3―2で勝ち、準決勝で総社西に2―3で敗れたが、3位に入賞した。男子個人では白神がベスト16に入った。光田舜は2回戦敗退，光田隆は1回戦敗退であった。女子個人では大野が1回戦敗退であった。

11月16～17日に総社市長杯卓球大会に参加した。男子団体では予選リーグで高松に3―1、倉敷北に3―2で勝ち、決勝トーナメント1回戦で中道に1―3で敗れた。男子個人では光田舜と白神が決勝トーナメントに進出し、白神がベスト32に入った。女子個人では大野が決勝トーナメントに進出した。

《高卓球部》 7月13日に国民体育大会卓球競技少年の部に出場した。男子シングルスでは、山本（U2）がベスト32に入った。

8月1日に令和元年度岡山県高等学校夏季卓球大会に出場した。2年生男子シングルスでは、山本がベスト16に入った。

8月5日に令和元年度倉敷市長杯争奪高等学校卓球大会（備中地区大会）に出場した。男子団体では、予選リーグで2位となり決勝トーナメントに進んだが初戦で敗退した。男子シングルスでは、山本がベスト32に入った。

8月23日に令和元年度岡山県高等学校秋季卓球大会に出場した。男子団体では、予選リーグで3チーム中3位となり決勝トーナメントに進んだ。決勝トーナメントでは、鴨方高校に3―0で勝ったが倉敷青陵高校に0―3で敗れてベスト32となった。

9月1日に平成31年度全日本卓球選手権大会（ジュニアの部）県予選会に出場した。男子シングルスでは、山本がベスト16に入った。

9月21日～22日に平成31年度全日本卓球選手権大会（一般の部）県予選会に出場した。男子ダブルスでは、山本・難波（L3）組が1回戦を突破した。男子シングルスでは、山本が初戦敗退となった。

10月26日～27日に令和元年度岡山県高等学校卓球新人大会（学校対抗）兼 第47回全国高等学校選抜卓球選手権大会岡山県予選会（学校対抗）に出場した。男子団体では、初戦で瀬戸南高校に3―0、笠岡高校に3―2で勝ったが岡山東商業高校に2―3で敗れた。2日目のベスト16リーグに進出し、4チーム中3位となった。

11月23日に令和元年度岡山県高等学校卓球新人大会（学校対抗）兼 第47回全国高等学校選抜卓球選手権大会岡山県予選会（学校対抗）（個人）に出場した。男子シングルスでは、山本がベスト16に入った。

《高サッカー部》 7月29日に練習試合を行った。対笠岡工業（35本×2＋25分）でスコアは（1―3）。8月5日、6日に西日本高校サッカーサマーフェスティバルに参加した。対新居浜西（0―4）、対柏原（1―2）、対姫路飾西（0―1）、対玉野（1―3）。8月9日、10日にIPUフェスティバルに参加した。対三田松聖（0―3）、対IPU（0―13）、対六甲アイランドA（0―1）、対IPU（1―7）。8月24日、25日にU16サッカーリーグに参加した。対龍谷（0―3）、対津山工業（0―2）、対関西（0―5）、対朝日（0―1）。岡山県高校サッカー選手権大会一次トーナメントの1回戦は対白陵（4―0）、2回戦は対おかやま山陽（0―2）。

《高男子ソフトテニス部》 8月17日（土）18日（日）、水島緑地福田公園テニスコートで高梁川流域高等学校ソフトテニス大会がおこなわれた。個人戦には3ペア出場したが、いずれも3回戦までで敗退した。団体戦は1回戦で倉敷天城Bに3対0で勝利したが、2回戦で倉敷翠松Aに1対2で敗れた。

9月21日（土）は岡山県新人ソフトテニス選手権大会（ダブルス）の備西地区予選会が玉島の森テニスコートでおこなわれた。7ペアが出場したが、そのうち岡田・石丸組が3回戦で敗れたものの敗者復活戦で勝利して13位となり、県大会への出場権を獲得した。そして11月2日

（土）には県大会（団体戦）が浦安総合公園でおこなわれたが、1回戦で津山東高校に1対2で敗れ、初戦で敗退した。続いて9日（土）におこなわれた県大会（ダブルス）には地区予選で出場権を獲得した1ペアが出場したが、初戦で倉敷工業高校のペアに敗れた。

《中柔道部》 7月6日に里庄武道館で地区総体が行われ、男子団体戦は笠岡東中学校に敗れ、第2位であった。男子個人戦には6名が出場し、中3柴田真喜人が階級別で優勝するなど、6名全員が県総体への出場を決めた。

7月22、23日に岡山武道館で県総体が行われ、男子団体戦は1回戦で連島中学校に勝ち、2回戦で鶴山中学校に敗れた。男子個人戦は6名が出場し、階級別で柴田真喜人がベスト8になるなど、それぞれが健闘した。

10月19日に里庄武道館で秋季大会が行われ、男子団体戦、女子団体戦にそれぞれ出場したものの、惜しくも敗れた。個人戦は男子5名、女子2名が出場し、それぞれが健闘し、計4名が県大会への出場を決めた。

11月2、3日岡山武道館で秋季大会が行われ、個人戦に男子3名、女子1名が出場し、それぞれが健闘した。

《高柔道部》 4月20、21日に岡山武道館で第66回中国高等学校柔道大会岡山県予選会が行われ、男子団体戦は2回戦で笠岡商業高校に勝ち、3回戦で関西高校に敗れた。敗者復活戦ではおかやま山陽高校と対戦し敗れた。女子団体戦は1回戦で勝間田高校に勝ち、2回戦で玉野光南高校に敗れた。敗者復活戦では岡山白陵高校に敗れた。。個人戦は男子9名、女子3名が出場し、高3宮口史穂が階級別で3位となり、中国大会への出場を決めるなど、それぞれが健闘した。

6月1、2日に岡山武道館で第58回岡山県総体が行われ、男子団体戦は1回戦で岡山白陵高校に敗れた。女子団体戦は1回戦で津山東高校に敗れた。個人戦は7名、女子3名が出場し、それぞれが健闘した。

6月16日に岡山武道館で第66回中国高等学校柔道大会が行われ、高3宮口史穂が階級別個人戦に出場した。1回戦で島根県代表選手に敗れたものの、金光学園としては5年ぶりの中国大会出場となり、部員の大きな励みとなった。

7月22日に福岡県照葉積水ハウスアリーナで金鷲旗柔道大会が行われ、男子団体戦に出場し、1回戦で長崎県海星高校に敗れた。

9月15、16日に愛媛県武道館で愛媛県高校柔道練成会が行われ、中四国を中心に多くの学校が集い、多くの練習を積むことができた。

10月25、26日に岡山武道館で第69回岡山県高等学校柔道優勝大会が行われ、男子団体戦は1回戦で岡山白陵高校に敗れた。男子個人戦は9名が出場し、高1大守陽向が無段の部中量級で第2位、高2大谷武市が階級別でベスト8になるなど、それぞれが健闘した。

《柔道部》 8月7日から10日までの3泊4日で本校柔道場を中心に、合宿を行い、岡山工業高校笠岡商業高校などの多くの中高生や卒業生にも参加していただきました。9日夜にはバーベキューも実施し、保護者の方々にも多大なるご協力をいただきました。大変お世話になりました。

《中剣道部》 7月6日（土）、備南西地区大会が笠岡総合体育館サブアリーナで開催され、男子団体試合は1回戦、笠岡東中学校に0対4で負け。男子個人試合は小林芳樹（3年）、田中康介（3年）が3回戦敗退。淺野優斗（3年）が4回戦敗退でベスト8となり、県大会出場。女子個人試合は新谷莉子（2年）が第2位となり、県大会出場。

7月13日（土）、岡山県段別選手権大会が宮本武蔵顕彰武蔵武道館で開催され、男子二段の部で、田中が1回戦、淺野が2回戦敗退であった。

7月20日（土）～21日（日）、岡山県中学校総合体育大会が宮本武蔵顕彰武蔵武道館で開催され、淺野が1回戦、新谷が4回戦敗退であった。

10月19日（土）、備南西地区秋季大会が笠岡総合体育館サブアリーナで開催され、女子個人試合で井上綾萌（1年）が2回戦敗退。男子個人試合で才野恵翔（1年）、山下劉（1年）が共に1回戦敗退であった。

11月17日（日）、第14回浅口市剣道大会が天草公園体育館で開催され、団体試合は1回戦シード、2回戦で玉島北中学校に2対3で負ける。女子個人試合は井上が1回戦敗退。男子個人試合は山下、淺野が1回戦、才野が2回戦敗退。田中が準決勝敗退で第3位であった。

《高剣道部》 7月14（日）、岡山県段別選手権大会が岡山武道館で開催され、男子参段の部で、新谷理駆（2年）が3回戦敗退であった。

11月2日（土）～3日（日）、岡山県新人戦が津山東体育館で開催され、男子個人試合で亀山裕汰（2年）が2回戦敗退であった。

《中・高剣道部共通》 11月14日（木）、創立記念式典のあと、15時から剣道場において、奉祝天皇陛下・皇后陛下御即位、金光教立教160年、金光学園創立125年、剣道部創部115年、剣道場開場30年（昨年12月1日が開場30年であったが、西日本豪雨災害で延期し、今回あわせて開催）「記念祝賀演武会」を開催した。

早朝より本部参拝、記念式典、記念講演を拝聴し、あらためて身の引き締まる思いのなか、部員の自主的な企画・運営での開催ということで、淺野優斗（中学3年）の司会のもと、山下劉（中学1年）の力強い部員代表宣誓で幕を開けた。木刀による剣道基本技稽古法、日本剣道形、基本稽古、部員相互の稽古や立合い、全部員と先生の指導稽古等の内容および日々の活動を総合的に考慮し、また市川真広先輩（高校3年）のアドバイスも受けて、「ほつま杯」を淺野優斗、「敢闘賞」を才野恵翔（中学1年）、山下劉の2名が受賞した。

これからも永き良き伝統を守り伝え、内面の充実をさらにはかり、ますますの発展を目指して、金光学園の合言葉の実践を誓い、閉会した。

《中男子バスケットボール部》 10月に行われた備南西地区大会では、準決勝で矢掛中と対戦し120―0で勝利し決勝へ進み、決勝戦では笠岡東中と対戦し85―25で勝利し、優勝することができた。この結果、11月に行われる岡山県中学校秋季体育大会への出場が決まった。11月に津山市にて行われた県大会では、本大会にて優勝した倉敷南中と初戦で対戦し、22―85で敗れた。

11月に岡山県中学生バスケットボール交歓大会が行われ、初戦で東陽中と対戦し、39―83

《中女子バスケットボール部》 10月19・20日に天草運動公園で行われた備南西地区大会では、一回戦井原中と対戦。金光学園66―31井原中学校で勝利し、準決勝、金光学園62―18鴨方中学校で勝利。決勝

戦では笠岡東中と対戦し、金光学園42―57笠岡東中学校で敗れ、準優勝に終わり県大会の切符を逃してしまった。

《高男子バスケットボール部》 9月に行われたウィンターカップ２０１９ 第72回全国高等学校バスケットボール選手権大会岡山県予選 備中地区予選会で、ブロック優勝をして県大会への出場権を得た。10月に行われた県大会では、岡山城東高校と対戦し、66―87で敗れた。

11月に行われた第72回岡山県高等学校バスケットボール新人優勝大会岡山県予選 備中地区予選会で準優勝をし、1月に行われる県大会の出場権を得た。

《中高少林寺拳法部》 11月2日（土）に開催された、第30回岡山県高等学校少林寺拳法新人大会兼第23回全国高等学校少林寺拳法選抜大会予選会に出場した。男子自由単独演武の部で坂本莉来（高2）が第一位、女子自由単独演武の部で能勢采奈（高2）が第三位、塩谷明美（高2）が第四位、原田麻未が第八位（予選敗退）。女子自由組演武の部で虫明紗桜理（高1）・難波日奈子（高1）が第一位となった。坂本・虫明・難波は中国高校新人大会および全国選抜大会、能勢・原田は中国新人大会に出場する。

《花道同好会》 毎週水曜日に宗教教室で兼信先生の指導の下、熱心に稽古した。

《家庭科同好会》 昨年度に続き、ほつま祭で展示を行った。「妄想実現主義」のタイトルを掲げ、頭の中に思い描いたコスチュームやアクセサリーを実物として製作した。高校3年の部員は「最後のほつま祭だから」と、受験勉強の合間を見つけ、熱心に製作に取り組んでいた。

《かるた同好会》 週3回、宗教教室で競技かるたの練習を行った。2カ月に1度の割合で、岡山県かるた協会長の長原先生に指導をして頂いた。9月23日（月）に児島武道館柔道場で行われた第22回中国地区高等学校小倉百人一首かるた大会岡山県代表選考会に高2橋本花穂、土橋果歩、阿部七菜子の3名が出場した。予選リーグで土橋果歩が1勝したが、決勝トーナメントに進出することはできなかった。

《歴史研究同好会》 ほつま祭に向け、戦国時代の武将の研究と山城の模型の作成に夏休みから取り組んだ。ほつま祭当日は来場者に好評だった。

会報

やつなみ保護者会地区会 7月を中心に24の地区で地区会を開催した。開催された地区の平均出席率は42パーセントであった。また、止宿の保護者の方にはアンケートでご意見をいただいた。地区会でいただいたご意見は、冊子にまとめて、全役員会で配布され、学校では今後の指導に活かされる。

オープンスクール手伝い 今年度は7月28日と8月24日の2回オープンスクールが開催され、三役と各部長他10数名の役員が2回にわたってお手伝いをし、例年のお茶、お水の配布に加え、昨年から始めたかき氷を配布し参加者に大変喜んでいただけた。

第3回評議員会 8月27日開催 会長挨拶の後、各部別協議と各部より報告。研修・出張の報告等がされた。

第2回全役員会 8月27日評議員会の後引き続き開催された。会長・校長の挨拶、学校近況報告の後、協議報告事項に移った。指導部からは、地区会の報告、街頭・列車補導について、庶務部からは、友愛

セール、大祭湯茶接待について、教養部からは、研修旅行と教養シリーズ発刊が今年度は講演者のご都合で発刊できない等、それぞれ報告と協議がなされた。また、友愛セールについての打ち合わせを行った。なお、今年度評議員会と全役員会の案内及び出欠について、メール配信によって試験的に実施。ほぼ順調に実施できた。

友愛セール 9月7日には準備、8日にはほつま祭での友愛セールを、全役員が一丸となって取り組んだ。近年遊休品の収集が難しく、一学期から夏休みをかけて、手作り会を開催し、手作り作品を多く販売した。企業協賛には37社のご協力があった。また、高3保護者有志による模擬店も好評であった。（収支決算については別項参照。）

金光教大祭湯茶接待 9月29日、10月6・10日の3日間に行われた、生神金光大神大祭に延べ31名の役員が奉仕した。また、12月8日に行われた、布教功労者報徳祭に7名の役員が奉仕した。いずれも全国の参拝者の方々に湯茶の接待をして大変感謝された。

やつなみ保護者会研修旅行 10月16日役員、ほつま祭の友愛セール・模擬店お手伝いの方を含め25名が参加した。金毘羅さんでの自由行動の後、昼食は江戸時代の屋敷を改装した「郷屋敷」の景観を楽しみつつうどん懐石で舌鼓。その後日本の夕日百景である父母ヶ浜（ちちぶがはま）で散策。バスの中でも終始和やかに親睦を深めた一日でした。（やつなみ保護者会のページ参照）

第四回評議員会 11月28日開催 2学期の主な行事（友愛セール・研修旅行・研修会・補導活動等）の報告及び反省が行われた。友愛セールの中間決算報告がなされた。

諸会合

○8月22・23日 全国高P連京都大会
甲田会長、上迫・北村・丸本副会長4名参加。

○9月20日 中国地区私立中高保護者会
会長等懇話会 上迫副会長出席

○10月12日 玉島警察署管内子供を守る母の会地域安全パトロール出発式 小幡・樫田評議員参加。

○10月28日 県私学秋季研修会 亀山副会長、川田・山下監事、加賀、小寺、岡本評議委員、他教師3名参加。

○11月1日 幼小中P指導者研修会。川田監事、加賀・中西、小寺、増田、田中、植野評議員参加。

○11月5日 浅口里庄P連母親委員会研修会 亀山副会長、川田・山下監事出席

○11月7日 備西地区高P連秋季総会
横山教頭出席

○11月19日 県高P連指導者研修会 川田・山下監事、佐藤副校長参加。

○12月9日 県私立中高保護者会連合会総会 上迫副会長出席

【令和元年度友愛セール決算中間報告】

収入	友愛セール売上	1,331,000
	模擬店売上	251,143
	チャリティー、予約販売	293,812
	売上追加等（寄付含）	395,700
	合　計	2,271,655
支出	手作り作品材料他諸経費	177,740
	友愛セール用物品購入費	0
	合　計	177,740
収支（収入－支出）		2,093,915
使途※	赤十字事業資金へ	20,000
	社会福祉協議会（歳末助け合い）	50,000
	合　計	70,000
残　高		2,023,915

学園だより

終業式　高3は7月17日に、その他の学年は27日に、1学期終業式が行われた。式後部活動での県大会上位入賞生徒及び中国大会出場生徒の賞状伝達式と全国大会出場生徒の壮行会も併せて行った。

授業・補習　7月18日～25日、中学および高1・高2が特別授業を、高3は補習を実施した。また、高3は8月23日～31日まで後期の補習を実施した。

個別面談　中高の全クラスで行われた。一学期を振り返り、夏休みの過ごし方や進路選択等について個別に懇談を実施した。

人権講演　7月23日、高2は名古屋女子大学　三宅元子先生から「ネット社会を上手に生き抜くために」という演題で講演をいただき、感想文を書いた。

夢ナビライブ参加　7月24日、高1生徒は大阪で行われた夢ナビライブに参加した。大学の先生の講義を受けたり、各大学のブースで説明を聞いたりして、大学進学・進路選択に対する意識を高めた。

オープンスクール　7月28日、8月24日、第21回目の一日入学が行われ、2日間で小学生や中学生および保護者を合わせて1400名の参加があった。授業体験や部活動体験を通して、金光学園での生活の一部を楽しく体験した。9月7・8日、PART2のほつま祭でも多くの小学生が参加した。9月25日、PART3の中学体育会は平日開催のために中止になった。

サマーチャレンジ　7月29日～31日、高1・高2特別進学クラス全員と総合進学クラスの希望者を対象にサマーチャレンジを実施した。高1は2泊3日で、高2は3日間通いで集中して英国数の発展的な学習に取り組んだほか、自主学習と小テストにより基礎的内容を定着させた。

韓国・仁川英語村研修　7月29日～8月5日、久野恵理子先生の引率で、生徒9名が韓国を訪問し、他国の生徒と交流しながら英語の学習を行った。

台湾グローバル研修　7月30日～8月5日、佐藤正俊副校長、守分俊浩先生、宰相夕佳先生の引率で、生徒34名が台湾を訪問し、ホームステイをしながら現地校との交流を行った。

教職員夏季研修　8月20・21日、全教職員が参加して33回目の夏季研修が行われた。初日は午前に金光八尾中学校・高等学校　中学教頭　玉里章一先生、広報部長　川田祐慈先生による『「グローバル教育」と「広報活動」の取り組み』と題した講演を聴いた。午後にはグローバル研修に伴う6カ年教育の在り方について、分科会でKJ法を用いてワークショップを行った。2日目は「生徒募集について今すぐできること」というテーマで分科会を行い、議論を深めた。実り多き研修会となった。

始業式　中学、高1・2は8月23日に、高3は9月2日に2学期の始業式が行われた。校長式辞の後、生活課からの諸注意、生徒会課から夏休み中の部活動及び生徒活動の表彰があった。

春川女子高校姉妹校交流　8月25日～30日、山本善直教頭、鳥越暁子先生、東山映子先生の引率で、生徒15名が春川女子高校を訪問し第10回の交流を行った。

課題テスト　中学は8月26日に、高1・2は8月26日～28日に、高3は9月2日にそれぞれ実施した。

教育実習　8月26日から21日までの期間、卒業生4名が2週間または3週間の実習を行った。

留学生来校　JFIE（日本国際交流振興会）留学生として、アメリカからガブリエル・コロンくんを、アジア高校生架け橋プロジェクト留学生として、スリランカからハンシカー・ネットミニー・ヘッティアーラッチさんを高校に受け入れた。

街頭交通指導　9月2日から6日まで教員が通学路に立ち、交通安全・交通マナーについての指導を行った。また、21日から30日まで「秋の交通安全県民運動」に合わせて指導を行った。

金光学園杯小学生招待バレーボール大会　9月1日、第17回のバレーボール大会がほつま体育館で行われた。19チーム（選手約200名）の参加があり、レベルの高い熱戦が繰り広げられた。

ほつま祭　9月7日・8日、「創れ青春～歩め令和～」をテーマに創立125年目のほつま祭が開催された。オープンスクール（両日開催）や友愛セール（日曜日）も多くの参加者で賑わいを見せた。

高校体育会　9月11日、降雨が心配されるなか、高校体育会が行われた。幸い全種目を実施することができ、それぞれの競技で熱戦が繰り広げられた。

霊地親睦の集い　9月16日、霊地各機関対抗の球技大会（バレーボール・ソフトボール）が行われ、学園教職員が参加した。親睦を深めることができた。

進路講演　高2は9月21日、香川大学の山崎裕正先生による進路講演『「未来」を知って、「進路」を考える。自分を成長させる大学への道を知る。』を、高1は10月5日に代々木ゼミナールの山根正義氏による講演「現役合格の鉄則―新テスト攻略の礎―」をそれぞれ聴いた。

中学体育会　台風17号のため3日延期された9月25日、晴天に恵まれ、中学体育会が開催された。華やかな踊りやマスコットが兄弟学級の団結力を示した応援合戦に彩りを添えた。

高校進学説明会　9月25日、公立中学校の先生方を対象に令和2年度高校入試の説明等を行った。

塾対象入試説明会　9月26日、塾の先生方を対象に朝2時間は全学年全クラスを授業公開し、その後の全体会では令和2年度の中学・高校入試などについて説明を行った。

ラッドフォードカレッジ姉妹校交流　9月26日～10月2日、第4回の交流として豪州ラッドフォードカレッジの生徒14名を受け入れた。生徒宅にホームステイをしつつ、授業や部活動の交流、広島・倉敷への研修を行った。

教祖生誕前夜奉祝行事　9月28日、例年のように金光駅から本部境内まで教祖の生誕を祝う提灯行列が行われた。学園教職員も参加し、学園御輿を担ぎ行列を盛り上げた。

高2大祭奉仕　10月4日6・7限に金光教本部で清掃奉仕を行った。

遥照登山　10月3日に予定されていた中1の遥照登山は、荒天により中止になった。

進路学習　中3は9月27日、高校教務課長の話を聴き、高校生活と進路選択について考えた。また、10月19日、高校からの学習活動に備えて進路適性検査を実施した。高2は9月27日、キャリア・サクセス代表　山崎裕正氏による講演「金光学園高校2年生のための進学ガイダンス」を聴き、新大学入試制度について学んだ。中2は10月4日、ANA客室乗務員　赤澤沙織氏（高53回卒）を招き、現在の仕事のやりがいに関する話を聴き、将来の職業を見据えた中学生時代の過ごし方について考えた。高1は10月4日、

代々木ゼミナール　山根正義氏による講演「新テスト攻略の礎」を聴き、文理選択について考えた。

京都アメリカ大学コンソーシアムの来校　10月4日、浅口市国際交流協会が主催する京都アメリカ大学コンソーシアムの留学生20名が来校した。保護者の国際交流サークルと流しそうめんの昼食を取り、中3との交流会の後、部活動体験を行った。歓迎式では音楽部吹奏楽団・国際交流クラブと交流を深めた。

金光学園杯小学生卓球大会　10月14日、第19回の卓球大会が小体育館で開催された。男女20チーム（120名）の参加があり、シングルスで男女別に優勝杯を競い合った。

高3大祭参拝　今年度は大祭と中間考査の日程が重なったため、参拝は行わなかった。

性教育　中1は10月25日にDVD「正しく知る！二次性徴Q&A」を見て、アンケートに答え、感想文を書いた。11月8日に男女の身体の相違を理解し、お互いに尊重することを学んだ。

教育相談保護者の会　10月12日、安原こずえ先生を講師に、3名の保護者と教育相談員とで交流会が行われた。

心の教育　10月18日に中1は金光道晴校長から中山亀太郎先生についての話を聴き、創立記念式を前にして金光学園の精神を学んだ。

中学・高校入試模擬テスト　10月26日、来春の中学校入試を受験する小学校6年生を対象に、11月2日、来春の高等学校入試を受験する中学3年生と学園の中学3年生（希望者）を対象に模擬テストを行い、多くの受験生が本番さながらに挑戦した。また高校の推薦入試受験希望者には面接を行った。その後、入試説明が行われ、それぞれに令和2年度入試についての説明を行った。

読書会　高1は11月8日に、高2は10月25日に、中3は11月22日に、中2は11月15日に、中1は11月26日にそれぞれ学年で希望の本を選び、各グループに分かれて、意見交換をした。

人権教育　中2は10月25日にビデオ「ひめゆりの塔」を見て感想文を書いた。中3は10月19日にEテレ「ハートネットTV」を見て、感想文を書いた。また、11月8日に各クラスで感想文をもとに話し合いを行った。高1は11月1日に長島愛生園の中尾伸治氏によるハンセン病についての講演を聴き、感想文を書いた。

教科担当者会議　中1から中3まで、日頃の授業の様子や中間考査の結果についての情報が交換され、個々のすぐれた点や改めたい点が指摘検討された。

ロードレース　11月11日、中学校全体のロードレース大会が行われた。男子は4キロ、女子は2キロのコースをそれぞれ力走した。

創立125年記念式　11月14日、創立125年の記念式がほつま体育館で厳かに挙行された。生徒代表 宮本将成くんの所願表明は、大変すばらしく後輩に向けても大変な元気を与えた。式典後、RSK山陽放送株式会社　代表取締役社長 桑田茂氏の記念講演が行われた。「チャレンジ！　NEW RSK～地方放送局にできること～」という演題の講演は、地方放送局ならではの番組制作やプロゴルファー渋野日向子選手についてなどを通して、報道の役割について学ぶ機会になった。今後の生活に大きな示唆を与えていただいた。

探究Ⅱ校内発表会　11月20日に理系が数学、物理・技術、生物、天文、看護の5つのゼミで研究した成果についてポスター発表を、21日に文系が教育、グローバル、地域学、心理、経営の5つのゼミで研究した成果についてプレゼン発表を行った。

お祝い　坂口務先生には岡山県私学協会功労者表彰を受賞、お慶び申し上げます。瀬戸信貴先生には9月3日に長女のご誕生、土井康広先生には12月7日に長女のご誕生、お慶び申し上げます。

お悔やみ　金光道晴校長先生の御母堂には8月1日にご逝去、吉永敬子先生の御母堂には8月30日にご逝去、謹んでお悔やみ申し上げます。

表紙の言葉

中学2年1組　萩原　正人

金魚大鱗夕焼の空の如きあり

夏の祭りで、よく目にする。金魚すくいでとれた金魚を水そうに入れ、ながめている。そうすると夕日で照らされた金魚のうろこが濃いオレンジ色となり、より一層金魚が、いきいきして見える様子を、表現しました。

水そうの中で、優雅に泳いでいる金魚を、頭に思いうかべて描きました。

金魚のうろこや、水そうの中に生えている水草の葉など、細かく再現してみました。

生命の美しさと自然の美しさが交わることで、さらに美しい物が出来るということが、とても素晴らしいと感じました。

高２修学旅行

北海道コース

オーストラリアコース

シンガポール・マレーシアコース

教室の窓から

ほつま祭、中学3年生は演劇に取り組むことが多い。私が担任するクラスも演劇に挑戦することになった。では、何をするかとなったとき、クラスで人気があったのは「ぼくらの7日間戦争」だった。原作は、子ども達が大人に反旗を翻し廃墟となった工場にたてこもる、という話。そのままやっても面白くないな。ということで、この話をベースに大胆にアレンジしようということになった。7月半ばからスタートした脚本づくりでは、有志が毎日下校時刻ギリギリまで意見をぶつけあった。どうやったら話のつじつまがあうのか。そもそも、子どもたちはなぜ立てこもったのか。どんなセリフをいれたら見ている人に伝わるか。面白いってどんなことか。「よくぞそこまで」と感心するほどの熱意で脚本は7月末に完成した。

そうして、8月末から本格的な練習に突入したものの、なかなかスムーズには進まない。ドキドキ、ヒヤヒヤしているうちにあっという間に本番の日がやってきた。

演技団体は、上演1時間前に控室に集合する。通し練習をする時間はないので、控室では気になるポイントだけ確認しようと思っていた。ところが、その控室で、ある女子生徒が、「ラストの花火の場面だけど、音と、照明だけで、花火だってことが見ている人に伝わるのかな?」と言い出した。最後の花火は、大切なシーンだ。ぜひ見ている人にわかってほしい。しかし、「今更?」だ。頭を抱える私。そんな私をよそに、色んな生徒が色んなことを言い始めた。「わかりやすいように『たーまやー!!』って言おう!」「いやいや、やっぱり、分かってもらえると信じて静かにみんなで花火を見つめよう!」「いやいや、コメディータッチを貫いて花火の音で倒れよう!」……。控室は大混乱に陥り、時間ギリギリのところで、女子の何人かが、花火の方向を指さして「あっ。花火!」と軽く言うことで決着した。その混乱の様子をみていて、はじめのうちは、こんな直前になっても、まだこの混乱ぶりとは……トホホ。と思っていたのだが、本気で意見をぶつけあう生徒たちをみていると「なんだか、いいな」と思えてきた。自分の意見が良いと思えば、誰にも遠慮せず主張できること。しかも、それを、自分が一発本番、舞台でやってやるぞという頼もしさ。そして何より、最後まで、自分たちの劇をよくしたいという気持ちを持っていること。まっすぐで素敵だ。良いことも悪いこともいっぱいあった準備期間の間に、白紙からスタートした物語が、みんなの大切なものに成長していた。

本番は、キャスト全員今までで最高の演技を見せてくれ、キャスト、裏方の一体感は素晴らしいものだった。入賞はできなかったものの、みんなが輝いていた。感動をありがとう!!

編集後記

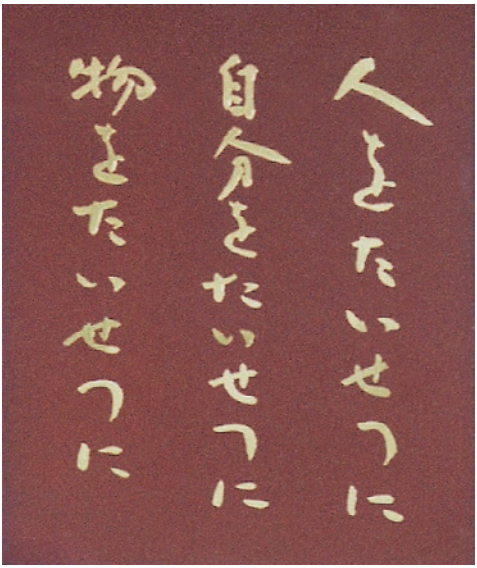
年の瀬が迫ると帰省だ何だで故郷のことを振り返る機会が増える。ごく個人的な話で恐縮だが、高校卒業までを過ごした愛媛県の片田舎に、小さな駄菓子屋があった。

35年以上前にしては、しゃれた店だったように記憶している。安価で魅力的なお菓子を求めて、わずかな小遣いを手に通ったことが懐かしい。遠足の前日には限られた300円をいかに有効に使うか頭を悩ませた。幼い頃の思い出の店「麦ばたけ」である。

さて、「麦ばたけ」と聞けば、学園最寄りのベーカリーショップを思い浮かべる人も多いだろう。パン屋だから「麦ばたけ」。長い間そう思っていたのだが、実は違った。例の駄菓子屋は知らない内にパン屋に変わっていたそうだ。そして、店主の息子さんが金光の地で、新たに店を開いたのだという。

愛媛の子どもと駄菓子屋が、数十年の時を経て、金光町の教員とパン屋として再会を果たしたのだ。奇縁と言わずして何と言おう。新しい「麦ばたけ」も昔と変わらず素敵なお店であることが嬉しい。

令和元年12月17日印刷
12月23日発行
編集者　金光学園やつなみ保護者会　やつなみ編集部
印刷所　倉敷市船穂町船穂二〇九五―一一　玉島活版所
発行所　浅口市金光町占見新田一三五〇　金光学園内　金光学園やつなみ保護者会



◎ほつま＝秀真

非常に優れ整い備わっていることの意。
「日本という国」の古異名の一つ。
創立後、生徒会や冊子の名に使用。
ほつま体育館、ほつま祭などで使われる。

◎やつなみ＝八波

どこまでもひろがり栄えゆく願いをこめる。
金光教・学園・中学・高校の徽章のふちどり。
ＰＴＡ機関誌創刊当時、会員から公募してつけた。

人をたいせつに　自分をたいせつに　物をたいせつに

http://www.konkougakuen.net
E-mail　info@konkougakuen.net